

---

# 魔法少年リリカル？なのは

こーこうせい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少年リリカル？なのは

### 【Nコード】

N5852Z

### 【作者名】

こーこうせい

### 【あらすじ】

え？何？コレ読むの？

「魔法少女リリカルなのはが男の子！？性別性格正反対の彼が巻き起こす魔法世界！！一体どうなってしまうのか！！？」

魔法少年リリカル？なのは、始まる」

はじめたくないよ。

## ブログ（前書き）

え、コレ？半分ネタだから書きたいときに書くよ!!!  
だから超不定期更新（笑）

まあ、性転換物なので苦手な人は即Turn Around!!!  
o Back!!  
あ、12/20めちやくちや変更

## プロローグ

薄暗い森の中で一人の少女が何者かと戦っていた。少女は腕から血を流し、満身創痍。

一方対する相手は見たことのないような黒く禍々しい物体。黒い物体は少女に体当たりなどを繰り返し、少女を苦しめていく。

少女は懐から赤い宝石のような珠を取り出し、何かを叫ぶ。すると目の前に光で構成される円形の模様が現れた。

黒い物体はそれにぶつかり、その体から強い光を発する。物体はその光を恐れてか、大きく跳躍し、それから逃げる。

少女はそれを見た後膝を着いてしまう。追いかけてようと立ち上がろうとするが、疲労のせいかうまく立てない。そしてついには地面に倒れ伏せてしまう。

少女の体はそのまま光り始め、小動物の姿に変わった。そして小さな声で、消え入るような声で叫ぶ。

「逃がし、ちゃった……追いかけてなくちゃ……。誰か……。ボクの声聞いて……。力を貸して。魔法の……。力を……」

その声は誰かに届いたのか、それとも届いていないのか……

- - - - -

P i P i P i P i ! ! !

けたたましい電子音と共に一人の少年が起きる。もぞりと布団が動き中から手が出て、音が出ていた対象、携帯電話のボタンを押す。

「もう、時間？」

そんな音と共に布団から出てきた顔はどうみても少女。

出てきたのは高町なのは、小学三年生。

男

どっからどう見ても少女だが男であるのだからしょうがない。ちやんとついでるよ？アレ。

現在時刻、6:00

さて、俺がこの時間に起きたのは他でもない。男らしい体になるため、トレーニングだ。俺の体は少し、いやかなり女。ついでに名前も女っぽい。男が女に見られるのは結構悲しいんだよ。

実は兄と姉は……まあ後で紹介するが、すでに起きて朝の練習をしていると思う。俺は小学三年生だから参加させてもらえなかった。まあ、休みの日はやらせてもらってるから多少は心得てる。

さて、今日やることは……朝のランニングかな。ひとまず3kmぐらいいつてこよう。

「ふう……」

とりま3km走って帰ってきた。ペースが上がっているのは嬉しい

よ。かなり嬉しい。だけどね、

「なんで道行く人すべてがなのはちゃんって言うかな。もう3ヶ月は走ってるのに」

多分いじめだと思う。

さて、家に戻り、シャワーを浴びて帰ってみると母さんがご飯の準備をしていた。

「あら、おかえりなのは。どうだった？」

「まあまあかな」

高町桃子

33歳の癖に謎の若さ。近所の人には魔女とか言われている。多分正解。俺の産みの親で女の子な顔にした張本人。髪の色から顔の形までほぼそっくり。男なのに。

「これもってってくれる？」

「あいよ」

母さんから渡され、もって行くいくつものコップ。俺には……お  
お、牛乳。I Love GYUNYU・英語だとmilkだがそ  
こは気にするな。

リビングにもって行くとそこには言わずもがな、100人中80人がイケメンだろうと言える人が。

「今日も走ってきたのか？偉いなあ……今度父さんも行くのかな」

「もう負けないよ？」

高町士郎

37歳という年の癖にイケメソ。近所の奥様方に人気。兄はこいつ譲り。ずるずる。

昔めっちゃ大怪我して入院してた。んで危ない仕事やめて今は翠屋つつう喫茶で働いてる。

翠屋は……まあ、黒歴史だらけだからまた今度。

さて、後いないのは兄と姉だけか……

「ちよつと二人呼んで来るわ」

「うん。お願い」

我が家自慢の道場にいったらみると兄と姉がいた。

兄は姉に小太刀二刀御神流を教えている。一見厨二だろ……とか思うけどコレマジ強い。

高町恭也

19歳。彼女もいるずるいやつ。イケメン。リア充。でもけんかは強い。

姉の美由紀。



高校2年。それ以外特になし。あ、あえて言うならかなりの料理音痴。砂糖と塩を間違えるならいい方。野菜を洗えといえば洗剤で洗ってくれる凄い奴。

「おーい、飯だつてさ」

後ろからタオルを投げる。

振り向かずに取った。半端ない奴。後ろに目でもあるのか。

さて、食卓につき、ご飯を食べる。俺は終始無言。

べつにしゃべれないわけじゃない。しゃべりたくないんだ。

「今朝のご飯もおいしいなあ！とくにこのスクランブルエッグが！」

「ほんとあ？トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味なの！」

「みんなあれだぞ？こんな料理上手なお母さんもって皆幸せだぞ？分かってんのか！？」

母親と父親然り。

いまだ新婚気分か。

「あ、美由紀、リボンが曲がってる」

「え、本当？」

兄と姉然り。

お前らはバカップルか。ってか兄、お前彼女いるだろう。

まあ、こんな具合でしゃべろうにもしゃべれない。甘ったるい空間が続くんだ。

飯から砂糖が出ないうちに俺はさっさと飯を食い、

「いつてきます」

早々と家を出た。

あそこにいたら胸やけがヤバイ。

まあ、そんな家族です。  
でも思う。

トッピングのトマトとチーズと、それからバジルが隠し味  
もはや隠してないと思う。

## プロローグ（後書き）

え、ただの紹介。

あ、気づいての通りなのはとユーノしか変えませんがーw

出会い(笑)(前書き)

遊びすぎましたすみません。

ってかやっぱギャグとか無理w笑いを取れる気がしない。まあ、普通にシリアス系になると思いますよ。

でわ、どぞ

## 出会い(笑)

家を出て俺が向かった先は私立聖祥大学付属小学校。わりと名門、わりと頭がいい。んで、わりとお金持ちが通ってるんで小学校なのにバス通学。

いつもの時間にいつものバスに乗る。するといつもの面子がそこにいた。

「なのはちゃん!」

「なのは!こっちこっち!」

昨日はへんな夢を見て眠れなかったし、正直寝たりなかった俺は普通に一人用の座席に座ろうと試みるが、二人の「あなたの座るスペースは私達の間が決まっている」光線にあえなく沈黙。

俺だって男だ。女子の間にはさまれて座るのはかなりの抵抗がある。そして気づいてないかもだがこいつらは一応美少女。周りの男子…: まあ俺のことを知ってる奴の視線がヤバイ。他の奴らは多分女子三人にしか見てないと思うけど。そして月村。ちゃんはやめると何度言えば分かる。

「よお、月村、バーニング」

「誰がバーニングよ!」

小1からの付き合いの月村すずかとアリサ・バニングス。どう考え  
てもバーニング。声的にもバーニング。

「いいかげんちゃんと名前で呼びなさいよ!」

「ああ、悪いな、アル」

「ほんとだよ兄さ……何言わせんのよ!」

ノリつつこみもお手の物なお嬢様です。

月村は終始微笑んだ。テラ怖す。

小1のあることがきっかけで（不本意ながら）仲良くなってしまっ  
た。

最近は同じ塾にも行っていたりする。

まあ、そのことは後述。

さて、学校に着いて適当な授業を寝てすごして、4時間目終了の合  
図。

「飯だー!!!」

「高町さんうるさい!まだ終わってません」

授業が延びていたようです。やられた。

さてさて、はずかしー思い（爆）をしてすぐあと、俺は屋上に来ていた。

屋上は昼飯を食べるには絶好の場所。んでかなり人気な場所でもある。いつも一人で行こうとするのだが

「なのは！まちなさい！」

「なのはちゃんまって！」

なぜかいつもこいつらが付いて来る

「おまえら女子と食えよ」

「いいじゃない。あんた食べる人いないんでしょ？」

「しゅく…」

確かに。

俺はこの容姿だからか、同性の友達は……多分いない。まあ、しゃべるくらいはあるが友達ではないかもしれない。つてか十人中十人が女というこの容姿。先生からも女子に見られていた俺は女子の友達しかいない。なんと言う悲しさ。

「ほら、行くわよ」

一人で行こうと思ったのに気づいたら3人いて、気づいたら屋上で飯食ってた。

「私はお父さんとお母さんの会社を継ぎたいかな。そのため経営学とかやるうと思ってる」

「私は機械系が好きだから、これから工学系に進みたいな」

「おまえら本当に9歳か？」

そしえ俺以外のこの二人。頭が大変よろしく、すでに将来のことを考えている。9歳なのに大学のことまで考えている凄い奴ら。俺は……まあ、そのうちなんとかなるさ。一応成績トップクラスやし。

「なあ、お前ら普通に就職とか考えてるけどさ、専業主婦とかはダメなの？」

「え？」



えって。普通はそっちが先に出るような気がする。

「だってよお、お前ら女だろ？そんなわざわざ仕事するとか……ばか？」

「バカじゃないわよ！！」

まあ、お前俺よりはバカだけどな。成績的に。

「ふ、普通に結婚とかも憧れてるわよ！？」

顔を真っ赤にして言うバーニング。  
そして辺りすっごい沈黙。

「」「」

「ちよっと！なんで黙るのよ！？」

俺と月村は顔を見合わせる。  
そして俺はバーニングの肩に手を置いた。そして目を見つめる。

「ひゃっ!」

「あんなバーニング」

「な、何よ……」

「結婚ってな？相手が必要なんだ」

刹那俺の目の前は真っ黒になった。  
だってこんな暴力系女子だれが受け止められるよ……こいつの告白シ

ーンとか考えてみ？絶対考えられねえよ。

「だ、大体あんたこそどうなのよ！あんたこそ結婚とか無理なんじやないの！？」

「なにをおっしゃるか。俺にはこいつがいる。なあ、月村」

「うん！」

口をあんぐりあけて驚いているバーニング。  
まあ、冗談はここま……どうした月村？

「なのはちゃん。式はどうする？和風？洋風？」

えっ。何この子。何言ってるの？

「そうよね。なのはにはさすが……お幸せに……」

「お前も何一言ってるの！？」

この事態を收拾するのに10分必要になった。月村はガチで悔しかった。どういこうこっちゃい。

んで飯食う時間残り2分ちよい。終わったな。

ところでバーニング。その手の袋に入っているのは？

「メロンパンに決まってるじゃない！」

狙った？

そして帰り道。

今日は残念ながら塾なので歩いて帰路に向かう。すると途中、バーニングがこっち行こう！とかいいだしてわき道にそれた。塾に行く近道らしい。

そこで俺はふと気づく。

ここ、夢で見た場所じゃね？

なんかへんな場所だった気はしたけど…

「どうしたの？なのは」

「いや、なんでもねえ」

そのまま二人についていく。  
すると頭の中に声が響いた

《助けて！！》

！！？

突然聞こえる音にこわばる。

「おい、お前らなんか言ったか？」

「へ？なにいつてるのなのはちゃん。何もいつてな《助けて！！》」

月村がそういつているときにも聞こえる謎の声。  
どーゆーことだ。

「幻聴？」

「はい？……すずか。離れなさい。きつとこいつ精神病患者だわ」

「んなわけあるか！！」

しかしそんなことを言われても聞こえてしまったのだから仕方ない。

とりあえず、頭の中で返事をする。

《俺に言ってる？》

まあ、こんなんの意味があるとは思えない。

気のせいか、と思い二人についていくことに。しかし少しあるいた後、再び聞こえてくる。

《良かった……聞いてくれた人が》

《うわ、マジで聞こえた！》

先に行く月村とバーニングを横目に、立ち止まり、耳をふさいで精神集中。

《説明は後ですますから……助けてください！》

考えるより早く、俺は先に行く二人を追い越し走り出していた。

「ちょー！なのは！？どうしたの！？あんた本当に！？」

「なのはちゃん！！」

バーニングの言葉を全力で否定したいがそんな暇はない。  
声を頼りに走る。

そして走った先にいたのはフェレットっぽい動物。首には赤い宝石  
のようなものがついている。体は傷つき、慢心相違だ。

「ちよつと、あんた…早すぎ…」

遅れてきたのは息切れ切れのバーニングと済ました顔の月村  
俺は地面にいたフェレットっぽいのを片手でつかみ

「月村、こいつ頼むわ」

「え？……わ！！」

月村に放り投げた

「フェレット？ってすごい怪我してる！！」

「ああ、病院でも行くか」

俺達二人は急ぎ足で近くの病院へ向かった。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!」

バーニングは遅れて着いてきた。まあ、息は切れてるが問題はないだろう



出会い(笑)(後書き)

辛口コメントくれると嬉しいです...

魔法（笑）（前書き）

作成時間10分という短さww  
まあ、半分ねただしww

でわ、どぞー！

## 魔法（笑）

前回のあらすじ

女っばい男高町なのは！学校ではお嬢様達と戯れてます！

帰り道、お嬢様（笑）のお達して近道したら幻聴が聞こえて来ちゃった。

声を頼りに歩くとなんか不思議なフェレットが……。怪我してるっぽかったからとりま病院へ！！

病院で見てもらったけど、怪我はたいしたことはないらしいよ！よかった！

まあ、衰弱はしてるみたいで、休養は必須だったさ！

「いんちよーせんせー。こいつって誰かのペット？ってかホントにフェレット？」

「うーん、フェレットなのかな？変わった種類みたい。それにこの首についてるのは…宝石？」

いんちよーせんせーの言つとおりフェレットには近いようで違つ。んで、宝石付けてるペットって……。バーニング家の犬かよ……。

「つけてないわよ!!」

「なぜいきなり叫ぶし。耳が痛い」

ってかなぜ分かった。

いんちよーせんせーがフェレットもどきの首についている宝石に触ろうとしたらフェレットもどきはふっと目を覚ましてきよるきよるしでした。何か探してんのかなーとか思ってたらなんか目があった。まった。

「……………」

「……………」

「……………」

全員の視線が俺に…………

「よせやい！照れるだろ！」

なぜかお嬢様二人にため息を疲れた。  
俺何かやった!!?」

「ってかこいつの引き取り先どうするのせんせー」

「うーん……まあ、しばらくはこの子も安静にしとかなきゃだから  
こっちで預かるけど……」

まあ、目線など見る限りキラッキラしてる月村家だろうなあ……バ  
ーニング家はほしがるかもだが噛み殺しそう。おもにバーニングが  
ちなみにうちも無理だな。飲食店だし。

「今度で良いわよ。明日も来てくれるかしら?」

「はい!!……って!!塾の時間!!」

返事をした途端に気づいた。

現在時刻 16:36 塾開始 16:45

俺としては遅れてもいいんだけど、1分でも遅れると宿題が増える  
のが困る。俺は宿題こなす派なんだ。

まあ、こっから塾まで走って7分……結構ギリギリかな。

とりま俺は全力疾走。見事6分で走りきりセーフ。次いで月村もセーフ。  
バーニング？

「あんたたち、なんでそんなに早いんだよ……」

9分かかって1分アウト。  
せんせーに宿題追加されてた。

んで、結局授業中寝てた俺。途中当てられた問題は余裕だったし、塾行く必要があるのか？とか思いつつ確認テスト……あ、やべ。全然わからねえ。

とりあえず家で相談してみた。

親父：フェレットって何だっけ？

母親：世話するなら

兄妹：異存なし

と、飼ってもいいことになった。

メールで報告したら明日学校帰りに取りに行くことになった。

まあ、なんだかんだでねーさんが世話してくれるんじゃないかなー  
とか思ってる。

さて、現在時刻21時前

正直そろそろ眠い。ということと寝ようかな？って思ってたら

グラリ

と世界が揺れた。幻聴が入ってきたときの感覚。目を閉じて集中すると本当に声が聞こえてきた。

『聞こえますか！？ボクの声が聞こえますか！？』

よくよく考えると夕べ見た夢の中の声と、昼の声は一緒だったよ。  
なんといいいますか嫌な予感。

『ボクの声が聞こえるあなた！！ボクに少しだけ力をかしてください！』

念のため、返事を出してみる

『お前、あのフェレットか？』

『！！あなたは！お願いです！早く来てくださ』

プツンという音と共に消える声。次いで異常な疲労感。訳も分からずベッドへボタンキユー。あ、うとうと気持ちいい……。つてところで何かが背筋を凍らせる。何かは知りません。走りに行っただってことにして、とりま病院へ向かった。

急な全力疾走と、急な停止、加えてへんな幻聴リターンズのせいか、病院に着いたら謎の頭痛。  
んで、気づいたら

「ナニコレ」

灰色の世界に。

いや、どゆこと？

そしておまけに頭上から凄い破壊音

ハツとして振り向くとそっから問題のフェレットが落ちてくる。綺麗に着地するとそのまま横を走っていく。

「お、おい！待って！俺呼んだだろ！？」

残念ながら答えることはなく、そのまま木へ上っていった。端から



見たら俺変態じゃん。

はぁ、と思って帰ろうとしたら再び破壊音。

「!?!?」

木のほうへ目を向けるとそこにあったのは倒れた木と真っ黒い怪物。

「なんだよ、コレ……どういふことだよ……」

圧倒的な力。何もかもを破壊する絶対的力。親父とか兄貴とかと稽古するときと似た感じ。いや、それよりもっと上のもの。誰もが得体の知れない物体に持つ感情だ。

そう、それはつまり

「かつけえ……」

憧れだろ。

恐怖心より好奇心が多い。俺だってまだ戦隊ヒーローもの好きだからな。

ふむふむ、と感心していると一匹のフェレットがよろよろ近づいてきた。ってか忘れてたよ。君の事。

「きて、くれたの？」

「しゃべった!!?」

まあ、さっきの幻聴で知ってたけどね。

そんなことをしていると真っ黒い怪物がこっちを向いていた。アレ？  
コレやばくね？

「とりあえず逃げんぞー！」

「えっ！？ちょー！！」

フェレットを抱え全力疾走。

ダダダダダ！っと町を駆け抜ける。ある程度行ったところで聞いてみた。

「アイツ何者？」

それにたいした答え

「君には資質がある」

「いや、その前にアイツ何？」

「少しだけ力を貸してください。ボクは探し者をここに……」  
云々。

あ、なんだろう。会話がかみ合わない。

「まあ、なんだ。とりあえず、俺には資質が合って、それで力を貸せよ」

「そう！、そうなんです」

なんか俺には魔法を操る力があるらしい。ソレを使ってフェレットの手伝い……なるほどねえ。魔法って事は空飛んだりするあれか。実にファンシーだね。

「貸してくれますか？」

「ああ、そうだな」

「ありがとございま」だが断る「ってええええ！？」

だってこええじゃん。流れるにあれだろ？あの怪物……っていうか今空から振ってきてコンクリを自由に破壊してるコレと戦うとかそいう。無理無理。小3に何頼むか。近づいただけでつぶされるわ。

「他にあたりな」

「御礼はしますから！…！」

「なんだと」

お礼……

「どんなことでも？」

「どんなことでも」

「無茶な願いも？」

「無茶な願いも！」

俺の顔女顔 フェレットの願い出なおしてもらおう 脱女キタ！！

「あんたいい奴だな！よし、引き受けた。で、何すればいい」

「ええ！！？いいのかい！？……分かった。じゃあ心を済ませてボクに続いて！」

お、おう。それだけで良いのか

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て。風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に。」

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て。風は空に、星は天に。そして、不屈の心はこの胸に。」

なんつつか厨二・

「この手に魔法を！レイジングハート・セットアップ！！」

「この手に魔法を！レイジングハート・セットアップ！！」

唱え終わったら宝石から声が聞こえた。

《Stend by Ready・Set UP》

瞬間俺の体を光が包む。

「なんだなんだ！！？」

「凄い魔力だ……」

いや、感心しないで。フェレット君。

光が強くなったところで頭の中で声が響いた。

《マスター。あなたの身を守る杖の形と衣服をイメージしてください》

なんかしゃべった!!?つかイメージなんて無理!!

《私はこのデバイス、レイジングハートです。よろしければ私が自動でおつくりしますが》

もういいよそれで!!

とりま心の中で叫ぶ。イメージとかすぐできないし!!そして服を剥ぎ取られ、お着替え。今人に見られたら死ぬ自身ある。だってさ

光が収まったとき、俺の服装はロングスカートっぽいズボン、それに白が基調なコート、極め付きに胸には大きな赤いリボンだったんだよ?

「なんで女っぽい服なんだよ」

《正直性別が判断できなくて……てへっ》

なんだろう。すっごくイラッと来た。

魔法（笑）（後書き）

女っぽいってのは分かってたはず。

レイハちゃんおちゃめ（笑）

なのはの服装は原作のスカートの真ん中を二股にしただけwだから  
ダボダボズボンなだけですw



魔法少年（笑）（前書き）

え、封印の呪文？

ふんがー！！

アドバイス感想くれると嬉しいです！

## 魔法少年（笑）

前回のあらすじ

怪我したフェレットもどきを保護！

最近起きる幻聴の原因はこいつだったらしい。俺には資質があつて魔法が使えるとか使えないとか！

んで、その日の夜。へんな怪物に追われた俺は魔法を使うの覚悟！

呪文を唱えてみたら服が変わった。

んで現れた服はなぜか女物だった。

「なんで女っぽい服なんだよ」

《正直性別が判断できなくて……てへっ》

……すっげえイラつくなおい。

それにしても、このデザイン。見たことあるな……あ、学校の制服か。

「成功だ！！」

フェレットが後ろで眩いていた。成功らしい。

どうせだから聞いてみよう。

「なあフェレット。コレ何？女仕様なのはなぜ？」

そう聞いてみたらフェレットは誇らしげに言ったよ。

「それはバリアジャケット！君の身を守ってくれる衣服だ！女の子の仕様なのは……君が女の子だからだろう？」

「いや、男なんだけど」

「……………ま、まあ、レイジングハートだって調子が悪いときもあるぞ」

「今の間は何だ今の間は」

こいつ絶対俺のこと女と思ってたな。

出てきた棒で肩をトントン……これ、いつも使ってる竹刀の重さと同じだ。使いやすい。

そんなことをしているとフェレットが叫んだ

「きますー！ー！」

見るとコンクリ破壊に夢中だった奴が思いっきり飛び跳ねてこっちに突進してきた。

「おいおい追いおいおい!!これどーすんだ!!?」

「えっと、えっと、ま、まずは防御を!!」

「どうやって」

「ええ!!?ええっと…どうしょー!!」

お前がパニクるなよバカヤロー!!魔法の事知ってるのお前だけなんだぞ!!?」

仕方ない!!こっちに来ちまってるのは変わらないから……

「あいつ自体をいなす!!」

向かってくる黒い怪物を兄貴の竹刀に、杖を自分の竹刀に見立てて角度を考えながら太刀筋を入れつつ避ける!!

とか考えてたんだけどさ

《Protection》

目の前にサークル状のシールドが現れた。勝手にレイハが防いでくれたみたい。

「おお！やるなレイハ！」

《ありがとうございます》

よし！今のうちに逃げるぞ！！  
フレットを掴んで

「え？ちよつと何を？」

「逃げる！！！」

猛ダツシュ。

んでついでに怪物の事を聞く

「あれは忌まわしい力の元に生み出された思念体……アレを封印するには元の姿に戻すしかないんです！攻撃や防御の魔法は心に念じるだけで発動しますが封印には呪文が必要なんです！」

「呪文ってあれか？びびでいばびでいぶー的な？」

「ソレです…！」

「……面倒なんだね。……はあ、フェレット君。俺の後ろにいなよ」

どどん厨二になっていく……

でも呪文か……呪文、呪文……あ、これでいいや

そんなことを考えていると前方から黒い怪物……思念体が登場。多分攻撃してくるだろう。でもこっちが守ってばっかじゃジリ貧だからな。こっちからも攻めていこう。

「レイハ」

《はい？》

「この杖剣みたいに見える？」

《……いえ、残念ながら形状変化で剣はありませんね……威力を高めるぐらいならできますが》

「ならそれで」

本当は竹刀みたいなら良かったんだけど……

つと、こうしているうちにも思念体は近づいている。思念体は突進じゃ無理と判断したのか触手を伸ばしてきた。コレは痛そうだ！

「ふっ!!」

俺はもちろんソレを受ける気はないので、ソレを避ける。武道をやっておいて良かった。受身の態勢をとりつつ、あえて触手に突っ込む。そうすることで触手の発生源に近づいて本体を全力でたたける!!

「よっしゃあ!これでいいんだな!?フェレット!ココで封印だな!?!」

そう、聞いたんだけど

「うわああああ!!」

ん?悲鳴?

………あ、俺が避けた触手をフェレット君が食らっちゃったよ。救出救出。

「何で避けるんですか!!」

「当たったら痛いじゃん」

「ならなんで後ろにいかせたんですか!!」

「ほら、君の事をすべてから守る盾になる」的な

「おもくそ僕が的だよ!」

おっしやるとおり。今度はそうしないよう、フェレット君をポケットに入れてGO!

再び伸びてきた触手を強化した杖で2本はじき、3本の間をころころ避ける。

「ふっ!ほっ!はっ!」

「へ?わああああ!」

あ、フェレット忘れてた。まあ、生きてるからいいか。

「フェレット、ココで封印すりゃ良いんだな?」

「は、はひ……ひひれす……」

完全に目回ってるぞ。  
なんかしまらねえけど



「封印するぞフェリットー！」

「はひー！ふうひんするはひまわしひふふはー！しゅへるひーとまー！  
《封印するはいまわしき器ー！ジュエルシードー！》」

ふっー！ここで秘密の呪文の出番だな！

「ジュエルシード、封印！」

レイハの形状が少し変わって封印モードにー！そしてレイハからの光が思念体を包み込んだ。  
思念体の頭にXXIの文字。

「ジュエルシードシリアル？？？！………封印！！」

言葉と共に飛んでいった光は思念体を包む。光が消えた先にあったのは……青い宝石。

「それがジュエルシードです。レイジンググハートで触れて」

「あ、うん」

ジュエルシードをレイハで触れる。すると宝石は吸い込まれて消えてしまった。さすが魔法。エスパー伊藤も目が点だわ。すると衣服も元に戻り、辺りに光も戻った。

「終わった……」

「あなたのおかげで…お疲れ様……あつ」

それだけ言うとフェレットは倒れてしまった。そして聞こえるのはサイレン音。

……あれ？ココ危なくね？まず小3という年齢が9時まで出歩いているのと破壊されたコンクリその他諸々。リパな犯罪者ってか不審者……

だだだ！…と家に向かって一目散に走った。

家を出てから30分……いまだにさっきの出来事が信じられない。女顔のただの小学生が怪物と戦うなんて……。女顔の時点でふつうじゃないけど。正直、疲れと疲れと疲れのせいでボーっとしてた。すっごく眠い。レイ八情報によると、なれない魔法運用は異常に疲れるためらしい。ユーノと会話する念話ってやつも魔法の一種で、初めて習うには上等だけど、慣れるまでは頭の負荷が半端ないって。それも一方的だったりすると受け取る側はその調節で精一杯らしいから疲れが凄いんだってさ。そのせいで眠気が凄い。ボーっとした頭で家の門をくぐるといたのはにーちゃん……

「おかえりなのは。随分長かったじゃないか」

「んー……」

「さっきサイレンなつてたが何か知らないか？」

「んー……」

「ん？その手に持つてるのはなんだ？」

「んー……」

質問に対して答える気力もなかった……。  
んで、後ろからやってきたねーちゃんが手の中にいたフェレット発見。

「あらかわいー　なのは子のこのことが心配で様子を見に行ったのね？」

「んー……」

「ね、名前はなんていうの？」

「んー……」

名前……そういえば聞いてないなあ……それよりなにより眠いよ俺は。やばい。もうそろそろ限界……  
そんな感じでボーっとしてると頭に声が響いた。

『ああ、忘れてました。ボクはユーノ。ユーノ＝スクライアです』

ああ、なるほどお……ユーノって言うのかあ……

『ユーノのあか……よろしくなあ。俺はなのはなー……』

『あ、はい。よろしくお願……ます、な……は。あ、ソレと一つ。  
今日の事は……れぐれも……にお願いし……。あまり……  
……に知れ……よー……で……』

えっ？何？後半ノイズ入ってよく聞こえなかったよ？そろそろ体が持たないらしいよ。

「ユーノ」

「ユーノ君って言うの？きっとお母さんが見たらかわいって喜ぶよ……」

そっかそっか、そりゃあ、よかつたあ……でもごめんなねーちゃん。今話してる余裕ないんだ。眠いんだ……。

「あ、そういやねーちゃんにーちゃん」

「「？」「」

半分眠り眼な俺。

まあ仕方ないと思う。こんな失言をしたのは俺のせいでもないはず。

「なんかな、俺魔法少年になっただっばい」

「「は？」「」

『は？』

3人分の声が響いたとき、俺は立ったまま寝ていた。

魔法少年（笑）（後書き）

封印の呪文の第一候補は「ふんがー」でした笑やめましたけどw  
ちなみになのはくんの封印の呪文は「く封印！」ですよ。男がリリ  
カルマジカルってもキモイじゃん！！

まあ、あんていの低クオリティ。

魔法ばれた(笑)(前書き)

なんだろう、この書きやすさ  
適感が大好きですw

このストーリーの目標は「適当」!!!まあ、クオリティは低くな  
りそうですw

んじゅ、ぶじゅ!

## 魔法ばれた(笑)

前回のあらすじ

へんな怪物に襲われたから変身!!! パワーアップした俺は見事怪物撃破!!!

話によるとこいつらは思念体なんだって。フェレットことユーノ君が行ってたから間違いないよ。

さて、家に帰った俺は疲れてふらふら。。。家に帰ってにーちゃんねーちゃんとはなして。。。そこで記憶が途切れてるよ。

P i P i P i P i P i P i !!!

けたたましい電子音と共に一人の少年が起きる。もぞりと布団が動き中から手が出て、音が出ていた対象、携帯電話のボタンを押す。

「ん、んんう…………ふわあああ…………あれ？俺いつの間に布団に…………」

確か、へんな怪物と戦って、何とか勝利。んでフェレットことユーノ君(?)の事情(半分も覚えてないけど)を知って…家に帰った。そしたら兄貴姉貴がいて…………あれ？何はなしたんだ？全然思い出せない…………

「って、ユーノどこ行った？」



周りにユーノはいない……もしかして、逃げた?!?それとも治ってなかった(はずの)怪我が悪化してどっかで倒れてる?!?!?やばい!とりあえずさがさないと!!

ちやつちやと着替えて会を適当にセット!階段を降りて皆のいる元へ。

「おかーさん!!ユーノどこか知って……ってあれ?」

そしたら見えてきた。

「ユーノ君、夕べは良く眠れた?」

「あ、あはは。はい。おかげさまで……」

なぜか会話してるユーノとお母さん。  
どゆこと

「あ、なのは!おはよう。すごいねえ……今でも夢みたい!」

「へ?」

「なに変な顔してるのよ!ユーノ君よ!まだ小さいのに立派だし、

## 魔法

だなんて物語みたいじゃない!!」

……ハイ?

なんで魔法の事知ってるんだい?誰か説明ぶりーず

「あら?昨日のこと覚えてない?夕べなのはが帰ってきた後に話してくれたじゃない!変身姿!!」

へ……そんなことあったか?

……おーけー。一回落ち着こう。席に座って、飯食って、牛乳飲んで……

……あ、  
思い出した。

……昨日

「なんかな、俺魔法少年になったっぽい」

「「は?」」

『は?』

完全に眠かった俺はこっから凄くぼやーっとしていた。

『ちょ、ちよつとなのは!!--皆には秘密って言ったじゃないか!!--』

「なに?なんかいったユーノ?」

「「?」?」

ユーノの念話が普通の声に聞こえていた俺は普通の声で返した。もちろん兄貴姉貴きよんとしている。そしてらユーノが言ったんだ。

「だ、か、ら!!--魔法のことは皆には秘密って言って……あ」

多分、ユーノも疲れてたんだ。周りに人がいること忘れてたのかな。俺の態度に腹がたつたのか、思いつきり叫んだんだ

「え?」

「フェレットが……しゃべった?」

完全に見られてしまったユーノ君。

「い、いえ！ボクではありません！！ボクはしゃべってません〜  
〜ツツ！！」

もう完全にパニック。こっから黙ってれば良かったのに。焦って隠そうとしてしゃべった。

コレを見た姉貴大興奮

「〜〜〜ツツ！！うそ！！すごい！！すごい！！え、え、お母さんのところ行こう！！おかーさん！！」

俺と兄貴とユーノを掴んでリビングへ。それにしてもすごい勢いだっただと思う。

リビングに着いたとき、おかーさんとおとーさんは凄くびっくりしてた。

「ね…！すごい！すごいよ！の子…！」

「どうしたの美由紀？」

「あのね、この子、このフレットしゃべるの…！」

はじめはポカンとしてたお母さんたちだったけど。

「ぼくはしゃべれませんか……!!」

完全にパニックに入ってテンパってるユーノが自爆。それを見てさらにびっくり。そして感動。

「ああくん!!かわいい!!凄いい!!何この子!!」

「すごい……いちぢな」

「で、この子どうしたの?まさか普通のフェレットじゃないでしょ?」

なんともまあ、現実を受け入れるのが早い人たちだった。普通ならあと30分は驚いてると思う。

「なのは。この子どうしたの?」

「えっとねえー森で見つけて〜病院で〜」

「それは知ってる」

「あ、そうか」

どうも頭が回らないよ

「えっと、走りに行くってのはうそでえ、ほんとにゆーのに呼ばれたんだよお」

「呼ばれたって……病院にいるユーノ君から？」

「うん〜なんか『念話』っていう魔法なんだってさ〜」

「魔法!?!?」

「そ。で、怪物に襲われて〜、俺が倒した。こんな感じに〜」

「えっ!?!?ちよっ!?!?えっ!?!?」

「れいはー、せつとあっぷっ」

《Stend by Ready・Set UP》

そこで俺変身。

多分おかーさんがココまで焦った顔を見せるのは最初で最後だと思う。

目を丸くしているおかーさんたち。

「はい、れいはありがとー。解除して良いよ〜」

そして元の服に戻った。そこでさらに疲労感。まあ、多分魔法を使ったからだと思う。眠いは眠いけどなんとか起きてます。そして我に帰ったユーノがさらに目が点。そして疲れたようにため息をつく。

「失礼しました。ここからはボクが説明します」

こんな感じで説明が始まった。

内容はまず自分の目的と素性。ジュエルシードを落としてしまって、反応があつた海鳴に來たつて感じかな。

んで、俺を危険にさらしてすみません〜みたいな。

「なるほど……そんな事情が……なのはのことは気にするな。なのはは簡単にやられるような弱い奴じゃない。現に帰って来ているしな」

おとーさん。少しは気にして。あの怪物普通じゃないから。

「大変だったわねえ……で、これからどうするの？」

「とりあえずは、ジュエルシードを探しに旅に出ようかと」

「ひとりで？」

「そうですね。他に頼れるところもありませんし……」

「寝るのはどうするの？」

「結界を張れるのでその中で」

ソレを聞いたおかーさん大反対！

「だめよそんなんじゃ！ーあぶないじゃない！もう、そうならそうと早く言えばいいのに！ーうちにいて良いわよ！あなたかわいいし！」

「えっ！！？で、でも……！！！」

「いいからいいから。それと探し者探すときは、遠慮なくなのはをつれてって！本当は私達も行きたいけど、仕事があるから」

そんな感じでいろいろ決定。俺を抜きで俺の生活が話に出ている件。

まあ、そんな感じな昨日だったみたいだ。

なんともまあ……俺間抜け。終始寝ぼけてたな……最後のほう半寝状態だったし……



「あゝ……あつたねそんなこと」

「でしょ？今日、ユーノ君探し物するみたいだから帰ったら手伝ってあげてね」

「おう」

んじゃ、行って来ます。ユーノ？おかーさんと留守番……ってか多分店にいるんじゃね？あとで念話送るって言ってたからいろいろO H A N A S H I するぞ。

.....

さてさて、学校に行きましたよ。  
学校ではある話題で持ちきり

「なのは！聞いた？」

「なにを」

「昨日の病院で車の事故かなんかがあったらしくて壁が壊れちゃったんだって！」

「フェレットが無事か心配で……」

あゝ……どうしょ。すっげえ身に覚えがある。と、とりあえず、昨日のことは他言無用なので……

「そのことはなあ……」

軽くぼかして真実を教える。

なんだろう。心が少し痛んだ。嘘っていけないよね。

魔法ばれた(笑)(後書き)

めちゃ微妙なところですねw

あ、そして原作ブレイク! まあ、ストーリー自体は変えない(はず  
!!)

んじゃ、感想よろしくです!

初！！vsジュエルシード（笑）（前書き）

まあ、適当なのは変わらないっすww

あ、途中会話がカオスになりますけどがんばってください！

一応『』が念話」「が会話ですよ

でわでわ、どうぞ！

感想待ってます

## 初！！vsジュエルシード（笑）

前回のあらすじ

朝起きたら異様な疲労感……うばあ

んで下に行ったらなぜか一緒になって話すおかーさんとユーノ。何があつた？って振り返ってみると結構黒歴史……まあ、魔法の事実は我が家で留めるそうです。

学校に行ったら昨日の事件の話題で持ち越し！！真実を言わないのって微妙に心が痛んだよ。

現在4時限目

腹も減ってきて授業に集中できないわけがない。いつもなら退屈で世間では国語と呼ばれる授業。いつもならば爆睡してる俺だったが今日は違う。ユーノとお話してるんだよ。なんだかんだで聞いてなかったユーノの事情を説明してもらってる。

『ジュエルシードは、僕らの世界の古代遺産なんだ。サクツ…モグモグ…本来は手にした者の願いをかなえる魔法の石なんだけど力の発現が不安定で…サクツ…モグモグ…夕べみたいに単体で暴走して人を襲つたり、たまたまみつけた人や動物を…サクツ…モグモグ…取り込んだりすることもあるんだ』

『なんでそんな危険なものが近所に？』

『ボクのせいなんだ……調査団に依頼してた…サクツ…モグモグ…』

護送船が何かに襲われたか何らかの事故で……サクツ…モグモグ…  
21個のジュエルシードがこの世界に広がってしまった…』

『あと19個………』

昨日見つけたのが1個、ユーノが持ってたので1個……コリヤ骨が折れるね。

それにしても、さっきから聞いてるとこいつジュエルシードが広げた原因が自分とか言ってるけどこいつのせいじゃないよね。事故なんだし。

『お前まじめだな』

『どつして…』

『だってお前が広げたわけじゃないじゃん』

『でも、見つけたのは！ボクだから！…サクツ…モグモグ…ちゃん  
と、元に戻さなきゃダメだから………』

なんつーかこいつかたいなあ……まじめというかなんと言っか……  
律儀？9歳って言う年齢なのに責任感じるなんて……周りの大人が  
フォローするべきだろ。

そんな事考えてたらユーノが言った。

『あ、ごめん。いいたいことがあったんだ』

『なんだ？』

『えと、昨日は…サクツ…モグモグ…巻き込んだじゃって助けてもらって…サクツ…モグモグ…申し訳なかったんだけど、ボクの魔力が戻るまで、ほんのちょっと助けてもらえればいいんだ。…サクツ…モグモグ…5日、そのくらいあればいけると思う』、

俺はその言葉に力チンと来た。なんだこいつ…ふざけるなよ？

『一つ言っただいいか？』

『えと、なに？』

『……………つぶすよ？』

『ハイ！！？』

俺は精一杯のドスが聞いた声でユーノを脅す。女声でどうなるかと思っただけど…案外迫力あるな。我ながら。

『お前さ、何？ココまで巻き込んでおきながら5日で良いです？ふざけんなよ？お前このまま魔力戻ったらどうするつもりなんだ？オ  
イ』

『……ジュ、ジュエルシード探しに』

『アホか！！ダメに決まってるだろ！！』

『ひう！？だ、ダメって……』

『……おまえそれで一回倒れたんだろ？ソレまた繰り返すのかよ！』

『そ、それは……』

呆れた……こいつ、真正のバカだ。また倒れたら元も子もねえじゃねえか……

『なんでも一人で解決しようとするんじゃないやねえよ！！俺らはもう巻き込まれてるんだ。俺の父さんも、母さんも、にーちゃんもねーちゃんも全部知ってるんだ！頼れよ！俺達を頼れよ！俺らはいつだって手を貸してやれる、お前を助けてやれるんだから！！』

『……なのは……ありがとう……』

びっくりした顔をしてユーノは驚いているだろう。

つたく。なんでこう、9歳の癖に一人でやろうとするかねえ……

『それにお前はうちのおかーさんはお前お気に入りなんだよ！お前



が消えると俺の悪夢が再びよみがえるじゃねえか！！それだったら喧嘩のほづがましなんだよ！！ぜってえ行かせねえ！！』

『ん？って、こっちが本音でしょ！？？』

注意、コレが本音

翠屋で起きる悲劇を繰り返したくはないんだ……俺のために死ね、ユーノ。……翠屋で何が起きたかは今度語る。今は思い出したくないよ。

まあ、おかーさんたちは喜んで助けると思っけどね。

『戦闘を喧嘩って言うなんて……はあ……でも、ありがとう。なのは』

『お』

とじろでさっきから気になった。

『ユーノ、クッキーうまいか？』

『とっつてもー!』

話してるときは愈つなよ。

現在放課後

いつものように月村とバーニングと帰路に着いている。正直二人はこっちが話さなくても延々と話し続けてくれる優れものなので、俺はユーノと念話をしていた。  
でもまあ、いつか会話と念話どっちもできるようになりたいね。

『な、俺って才能的にはどうなの?』

「でね!??うちのお父さんったら今からお見合いしろって言うのよ  
!?!?信じられる!?!?」

『なのはは……もう立派な魔法使いだよ』

「あはは……それは嫌だね……。あ、でもアリサちゃん、『好きな人

「がいます」って言えばそれなくなるんじゃないかな？」

『どれくらい？』

「好きな人って……誰よ？」

『少なくとも、ボクよりはずっと』

マジか！！ユーノって9歳で発掘とか負かされるほどエリートなん  
だろ！？それなのに俺のほうが上がって……

「なのはちゃんがいるじゃない」

『そうなのか！？自分じゃよく分からないんだよな……』

「な、何言ってるのよ！！なのはなんて……」

『うん。魔力量とか考えれば絶対。訓練すれば絶対強くなれるよ』

「なのはちゃんとお似合いだと思うけどなあ……」

『ふーん……訓練かあ……』

「何言ってるのよ！それならすずかのほうが……それ以前に、なのはは私とは嫌でしょ！！？」

訓練……少しぐらい体に影響とか出るかな？

たとえば筋肉ついたり、背が伸びたり……もし本当なら強くなれるし男らしくもなれる……一石二鳥じゃないか。  
最近ランニングじゃ行き詰ってたんだ。思わず声が出るね!!

「悪くないな」

「「えっ?」「」

「え?」

『え?』

今何が起きた?

なんか謎の情報の誤解がありましたして頬に紅葉が咲いております。ええ、もう立派なもみじです  
思いつきりたたきやがって……まずは念話から教えてもらおう。すつごく痛い。心も体も痛い。  
さて、今家から少しだけ離れた商店街にいるんだが、歩いてたら変な感覚に襲われた。

「……ッッー！」

グラっと言っかなんと言っか。背筋が一瞬だけ凍ったんだ。紅葉が疼いたんだ。

思わず立ち止まるレベルに。

『おい、ユーノ！今のって！！？』

『うん。新しいジュエルシールドが発動している！！すぐ近くだ！！』

マジかよ……昨日の今日だぞ！？もう2つ目発見かよ！

『べっするー』

『僕もすぐ向かう！手伝ってー！』

べっすら早速喧嘩が起こりそつだ。

走りながらユーノと合流して、ポイントへ向かう。  
場所はちよつとした神社だった。家から神社と商店街から神社だと商店街からのほうが遠いんだけど、まあ、追いついたのはランニングの賜物か。  
発生ポイントは境内らしいよ。

「なのは！レイジングハートを！！」

「え？お、おう！」

レイハ……どこしまったっけなあ……

ヤバイヤバイ！！もう境内に着いちゃうじゃねえか！！

先に走っていたユーノは頂上に入ったときに

「現住動物を取り込んで暴走している……！！」

とかいってた。

遅れて俺も上がると……

「わああ」

モデルは犬か。目は四つあるし牙も大きくなってる。なにより大きさがおかしい。

「こいつ、どんな感じ?」

「実体がある分手ごわい!」

この間は思念体だったけど……アレより強いのか……  
まあ、あいつ破壊力は凄いけど攻撃避けられたしな

「まあ、余裕だろ」

俺は言い放った。多分ドヤ顔。

「なのは!! レイジングハートの起動を!!」

「へっ?」

俺は言い放った。多分口ぽかん。

「我は使命を……から始まる奴だよ!! はやく! はやく! 来ちゃっよ  
お!!」

「あんなの覚えてるわけねえだろ!？」

「ええ!!!! どうしよっ!!!!」

やっべ、怪物こっちに来た！しかも犬の分早い！  
つてかユーノ落ち着け！！お前しか頼れねえんだぞ！？

「じゃ、じゃあもう一回……………」

「そんなじかんねー！！」

そんなことしてたら

「うわああっああー！！」

「きゃあああー！！」

犬が突進してきた。

ああ、もうダメか……………そう思ってたら

《Stend by Ready! Set up!!& amp; protection》

レイハが自動で武器とシールド作ってくれた。

犬は大きく吹っ飛んだ。吹っ飛んだ犬は地面にたたきつけられ、うめいている。



「パスワードなしでレイジングハートの起動!!?」

ユーノも驚いてるらしい。って良く考えれば昨日眠り眼で何も無しで起動してんじゃない。

「い、今のうちにバリアジャケットを!!」

「バリアジャケット?あの女っぽい服か?嫌だよ」

「で、でもそのままだと攻撃食らったら……!!」

「喰らわねーから問題ねー」

女の服を着るのはこりこりなんだよ!!

さて、そんなことをしてたら犬が立ち上がって完全にこっちへロックオン。後ろ足までけっちゃって……突進する気満々ですね。

「まあ、このままじゃやられっかもな……レイ八、身体強化できるか?」

《できますが……どれくらい?》

「とりあえず全力で物を蹴っても足に支障が出ないくらい」

《了解しました》



光が犬を包んで締め付ける。光が消えたと思ったらジュエルシールドが落ちてきた。それをレイハで回収つと……

「どつ？俺の戦闘法。もともと剣道やら空手やらやってるからな。相手の間合いを読むのは得意なんだよ」

俺は誇らしげに言う。そしてトヤ顔。

対するユーノは

「コワイコワイコワイコワイ……」

ずっと呟いてた。まあ、やる前に言えばよかったんだけど…コレでビビッてたら21個も回収できなかったんじゃないかねえの？俺はユーノの怖がりっぷりにため息をついた。

まあ、こんな感じで俺の魔法生活1日目は終わって行ったよ。

それにしても……さっき「きゃあああ！」って誰かが言ったけど…誰だったんだろ。

女の人なんて……いたかなあ？



初！！vsジュエルシード（笑）（後書き）

どうでした？w

魔法少年なのに魔法を使っていないこの現実。封印ぐらいか…？ww  
一応、設定なんかないけど、砲撃の遠中距離タイプにはしますよ。  
しろーさんのおかげで近接も強いけどw

でわ、感想待ってます

覚悟（笑） 1（前書き）

ごめんなさい眠くてかけませんw w

そして多分今日が今年最後の話かな。中途半端ごめんなさい。そして話めちやくちや笑えない。

## 覚悟（笑） 1

あはは、うふふ。男の顔になった俺が走る走る。

あはは、うふふ。男の顔になった俺が同姓としゃべるしゃべる。

俺が魔法少年（爆）になってから早1週間。なんとというかわりとまじめにやっていますよ。

そして今日は日曜日。誰からの誘いも受けず寝ると決めてるんだ！！  
まあ、無理もないと思う。連日学校＋探索。それに『身を守る力をつけておけ！！そんなんじやユーノを守れないぞ！！』とか言う吐くほどありがたいお言葉により行われる超ハード訓練。  
体力もたねえっての。

だというのに

「なのは！！朝だよなのは！！そろそろ起きなきゃ」

クソユーノめ……折角のいい夢を……俺の念願の夢なんだぞ！！

「今日、日曜日。俺、寝てる。ちょっと寝坊させて」

「だめだよ。なのは。なのはってば!」

ああ、この光景は……

レイハをもってバリアジャケットを着て空飛び回っちゃうツインテールの女の子……顔俺かよ。へどが出るちくしょう。

ああ、くそぞう。

二度寝ってダメだな。いい夢見れない。

仕方ないのでごろんと寝返り。

「うわああ!ちょ!!!つぶれる!つぶれる!!!」

背中に乗ってたユーノが今俺の背中の下にいるがどうでもいい。  
俺は疲れてるんだよ。

ココ最近で集めたジュエルシードは5つ。  
魔法?上達してないんじゃないかね?基本蹴りと殴りしかないし。カウ  
ンターって凄い!



「あーダメだ。眠い」

もう、眠さが限界なんです。

それに見かねたのか、ユーノが上ってきた

「なのは、今日はジュエルシード探しはお休みにしよう。5つも集めてくれたんだし、体も休めないよ」

.....

「なら起こすんじゃないよ!」

「うわあああ!」

とりあえずユーノのアホ毛を引っ張って毛布に包んでみた。まあ、しばらくは出れないんじゃないかね?

完全に目が覚めてしまった俺は着替えて階段を下りた。

台所で「ユーノ君は?」って聞かれたけど「まだねてるー!探索で疲れてるみたい!ゆっくり寝かせてあげて!」と喋っておいた。きつとこれで俺の部屋にも誰も近づかない。ユーノよ。もがき苦しめ。

わー！  
わー！！

……ああ、何で俺こんなところにいるんだろう。

「高町！そっちだ！」

なぜか地元サッカーチーム……ってかうちの親主催のクラブチームに参加させられてる。折角寝てようと思ったのに……。

ププー……

あ、うちのPKじゃん。

「高町撃てよ……」

俺ですか？眠くてへろへろですよ？  
他の奴がいけよ

「なのは！がんばりなさい……」

「なのはちゃんがんばってー!!」

oh... 周囲の奴らの視線が厳しい。なにしてくれるバーニング月村。正直に言おう。嬉しい。嬉しいよ? だけどさ、』はずせ。はずして恥をかけ』ってオーラが敵味方両方の選手から出てるよ!!? ?

くそ……後に引けねえ……!!

打つしか!!

ピュー!

ホイッスル……

俺は走ってボールを蹴る。

ボールは飛んだ。

ゆっつっつっつくりと。遠藤選手並のゆっくりのシュートを。

ああ、力でねえ。

力が出なかった足は見事にボールをゆっくり飛ばした。相手キーパーは待てきれず飛び出してしまうってゴールラインを割った。そしてそこで試合終了。2-1で俺らの勝ちだった。

「ビシッと打ちなさいビシッと!」

くそつ。周囲の奴が『ざまあ』って目で見てやがる……くそつ。  
バーニング許すまじ。

勝った後は翠屋で飯食ったよ。

メンバーは中で食ってるのに俺だけはじかれた。俺だけ外テラスだよ。近くにバーニング月村いるけど。めっちゃこっち見てるけど。

『女子はきんせーだ!』だってさ。俺は女子じゃねーっての。まあ、いいや。コレならゆっくり寝られる。

そんな感じでテラスで突っ伏してたら

「高町君、だよね?」

「うん?」

なんか声かけられた。逆行で顔が見えません。誰だろ？

「あ、あの！今日の試合かっこよかったです！！」

うん？

「これ、貰ってください！！」

うん？

女の子は持っていた箱をテーブルに置くとそのままどっかいつちま  
った。何事？

「見ました？奥さん」

「み、見ましたわよ奥さん」

ん？なんか沸いてきた。ってかバーニングがやるとすっごく変だな。  
無理してるのがばればれだよ。

「ちよつとなのは！誰よ今のは！？」

「ん？今日来てた知らない子。でもまあ、かわいかったのか？」

「そ、そうね……あたしより……その、……大きいし……」

かわいいはかわいいんだ。最後のほうが聞こえなかったよ。何が大きいって？

まあ、どうでもいいけどさ。

「何もらったの？なのはちゃん」

「わからん……開けてみるか」

中身が気になるのでちょっと拝見……ってわあお。

まさかのまた箱だよ。

「どゆこと？マトリョーシカ？」

「いや、ただの二重梱包だっただけでしょ」

それもそうか。

まあ、中身はまた今度見るかな。家でゆっくりと。でもなんだろうなあ……なんとなくこの中から嫌な感じがするんだよなあ……。

「どうしたの？なのはちゃん」

あれ、顔に出てたか？いけないいけない。

「いや、ちよつと疲れたただだよ。多分。中身は今度教えるよ。それとも二人とも時間じゃない？」

俺の言葉に二人ともハツとする。

これから二人は用事があるんだとき。月村は姉とお出かけ、バーニングは買い物。ちなみに俺の予定は昼寝。朝寝れなかった分爆睡するんだ。

「ほら、ちよつとサッカーのほうも解散だし、こころで解散しようや。」

「そうね。じゃあそろそろお暇するわ」

「おう。じゃあ、土産よろしくバーニング」

「なんでよ！！」

「いいじゃない。勝利祝いよ、勝利祝い！」

「むう……」

冗談だけどホントに買ってきてくれるかな？  
まあブルジョワに期待。

「じゃあ、またね！」

「ばいばい、なのはちゃん」

「おー」

そんな感じで二人と別れた。さあ、帰って寝るか！というときに来たのはサッカークラブキャプテン。早く寝たい、その一心の俺。なるべく早く済ませよう。

「あれ、どしたの？」

「ああ、ちょっと頼みがあってね」

ん？と思って聞いてみると

どうやら彼女（呪）に送るためのプレゼントは買ったんだけど、箱を忘れてしまったとか。それでテーブルの上によさげな箱があったから一つくれないか？ということらしい。なんといい。彼女などふざけるなよ。リア充は爆発すればいい。俺なんか友達もまともにいないのに。

「あーいーよ。好きなほう持ってって」

「ほんとうかい！？ありがとう！」



そういつてキャプテンは一つの箱をつかみ取りして、ありがとう！とだけ言うのと走って行った。その後ろから付いて行ったのはきつと彼女だろう。

ちくしょう。なんかひどい目に会えばいいのに……ちょっと不謹慎か。

さて、用事も済んだことだし、帰るか。と俺も箱をつかみ取り。ポケットにねじ込みそのまま帰宅した。

帰って部屋に入ったとき

「うあー！！」

と、まだ布団に苦戦してるユーノに苦笑。  
あれから何時間たった？

そしてユーノがいるのを確認してベッドにダイブ！！

「ふぎゅー！？」

変な声が聞こえた気がするけど問題ない。おやすみ。  
あ、そういえば、箱の中身見てないや……グウ

覚悟(笑) 1 (後書き)

一言

うぼあ

## 人物紹介

高町なのは

9歳

基本面倒くさがりやの男の子。

男なのに顔、声、髪、その他諸々をほとんど母から受け継いだのでどうみても女。

最近改善するためにトレーニング。

魔法が来てからはそこまでやってない。

魔法のタイプとしては砲撃タイプだが大体強化した拳か蹴りで何とかなってしまいうので今まで魔法という魔法を使ったことがない。

ユーノ＝スクライア

9歳

ジュエルシードを探しに来た女の子。

基本フェレット。そして自分の欲に忠実。人と話してても気に入ったお菓子は放さない。

頭、魔法、魔法センスすべていいのだがアホなのが玉に瑕。そして慌てる&何もできないほど弱い。

現在ののはの母、桃子のおもちや。  
ちなみに1代めはなのはだった。

## 覚悟(笑) 2 (前書き)

新年あけましておめでとございます!!

ということでも早速更新! w w

まあ、なんだ。頑張つて更新していくので、今後もよろしく願います!

今回、半分以下ちょっと鬱展開……まあ、たまにはいいかなと。  
ただシリアス崩壊してるので注意!!

でわ、どうぞ!!

## 覚悟（笑） 2

部屋でぐっすり寝てたらゴゴゴゴゴ！って何か動き出したんだ。

「何事!?!」

飛び起きてみたら視界に入ったのは

「な、のはー!?!」

俺のお腹に乗って完全にキレたユーノだった。そういえば思いつきり踏み潰したもんね。

「どしたの、そんなにオーラ撒き散らして。」

「ボク押しつぶしたでしょ!?!わかっててやったでしょ!?!」

後悔はしていない。反省もしていない。睡眠を妨げる奴は即成敗。コレ大事。

「いやあ、悪い悪い」

ってかゴゴゴゴってユーノの背後から出るオーラだったのか。

「ボクがどれだけ大変だったかわかる！？そりゃあ、なのはを起こしたのは悪かったけど……だからって毛布にくるむことはないじゃないか！せつかく桃子さんが来てくれたときも『ぐっすり寝てるのねえ』って言ってどっか行っちゃうし、やっと出れたと思ったらなのはが帰ってきて潰されるし！！しかも、その……なのはの……その、アレが……当たるし！！」

「アレってナニ？」

「~~~~ツツ！！バカ！！」

しっぽでガツされた。  
痛いです。

「ユーノ、悪かったよ。ほら、お礼にこれあげるから」

そう言って渡したのは今日女の子から貰った小箱。

正直名前も知らないの……ごめんなさい。ってかこの箱貰った時何か嫌な感じしたじゃん？

「???ん？ユーノ、そんな怪訝な顔してどうしたよ」



「ねえ、なのは。これの中身確認した？」

「してないけど？どした？」

「ん〜…気のせいかもしれないけど魔法の匂いが…」

おまえ本格的な動物なんだな。しゃべれるから忘れてたけどお前動物だったね。

「まあ、なんだ。嫌な予感はしたんだ。貰った時からわ〜んつて何かが来た」

「そんなもの渡さないでよ!!!？」

「ごもつともで。さてさて、中身確認……っつて、あれ？」

「何も、入ってないね？」

「だな」

「うーん…何か嫌な魔法のお匂いがしたんだけどなあ……」

それってどんな匂いだよ。

まあ、確かに俺も嫌な予感ほしたけどさ。この箱からはしないんだ

よな。

つて、あれ？この箱少し大きいな……一回開けた時はもう一回り小さいのが…

あ

もしかして俺、中身ある方キャプテンくんに渡した？中身って…あの嫌な感じがする……

「ユーノ、緊急事態」

「え！？どうしたの？なのは」

「魔法の匂い、間違ってるないかも」

「ええ！？」

「しかもその匂いの物キャプテンにあげちゃった」

「ええええええ！！？」

あい。わたくしめが悪いです。  
そしてその刹那

ゴゴゴゴゴゴ

と腹の方から揺れと共に地響きがあった。

「!!..なのは!!..」

「ああ!ちよつと離れとく!」

「え?なんで?」

「え、だつてお前の屁じゃ……」

「~~~~~ツツ!!バカツ!!」

しつぽでガツされた拳爪でひつかかれた。  
痛いです。

「冗談は置いといて」

「うん。今は明らかにジュエルシードだ。行こう!!」

「ああ!」

ジュエルシードの反応地点まで走る。とはいっても結構遠い場所だ

ったので、ちょっと近くにある高層ビルへ。当たりを見回す寸法だ。何も無いといいんだけど。

ビルに登った俺はレイハを起動。

「レイジングハート、セットアップ」

《yes・Stend by Ready・Set up》

辺りがピンク色の光に包まれる。

……コレ、バレない…よな？バレたら俺死ぬぞ？社会的に。

「ふう」

バリアジャケットと杖が現れ、地面に降り立った俺は一言

「わぁお」

無理もないと思う。だって見渡す限りの大樹。ビルは突き抜けるは車は突き刺すわ…死者が出てなきやいいけど。

「たぶん、人間が発動させたんだ。強い願いや思いを持って発動させてしまうと、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから……」

……やっぱりあの箱の中身はジュエルシールドだったか…

「くそっ…俺、気づいてたのに…俺のせいなんだ。なんとなく、嫌な感じはしてた。ちゃんと見ておけばこんなことになる前に止めることができたかもしれないのに」

「なのは……」

拳を握り締め、うつむく俺にユーノが名前を呼んだ。

「ちゃんと見て！止めて俺が持つてれば！..」

俺は拳を握り締めて叫ぶ、自分自身に。何も出来なかった自分に。ユーノはこっちを心配そうな目で見つめてきた。わかってるさ。もう、元に戻らないことぐらい。

でも！！俺が持つてれば！！

「俺の願いが叶ったのにー!!」

「っておい」

だってそうじゃね？せつかくユーノがいない時。俺が自由に魔法を使うチャンス!!ジュエルシード発動させれば俺の顔も過去も元通りに!!

「何言ってるんだよ!!そんなことのために使っでいいはずないだろ!!」

「まあ、俺もこうなることが予測できりゃつかわねーよ」

だって危ないもんね！！自分の身が一番大事だよ！！

「さて、どっちにしろこの事態収集させなきゃだな……」

どうしようか？俺はいつも格闘技だけで倒してきた記憶がある。突進してくる奴にカウンター。上からくるやつにハイキック。下からくるやつはいなして寝技。

遠距離なんてやったことがない。

やばいねやばいね！！ウズウズくるね！！早くヤリタイ！！

最近、バトルジャンキーっぽくなってきたけど、気にしな

い！！！！

「途中から声出てるよ」

すみません。今の俺じゃないです。正直早く寝たいです。テンション上げて大事なんだよ。

「なあ、ユーノ。どうすりゃいいんだ？」

「えっ？ど、どうって……」

「こいつと全力全壊のバトルをする方法だよ！！」

「えっ！？それは知らないかなあ……」

あ、やべっ！ユーノの額から怒りの四つ角マークが……遊びすぎた。  
ゴホンッ

「ごめん冗談。事態を収集する方法を」

「うん。まずは、接近しなきゃダメだ。元となっている部分を見つけないと……」

却下。こんだけ広いのを探すと日にちがやばい。ってか俺の存在世間にバレる。社会的に死ぬ。  
うん……ってか元を見つかりゃいいんだろ？

「まあ、元を見つければいいんだな？」

「う、うん」

「よし！！レイハ！！」

《Yes・Area Search!!》

せつかく使える魔法だ。こついつ時こそ使うべきだよな。  
そしたら俺の周りからでつかい魔方陣が現れた。……いよいよ厨二  
……もついいや！



「よっしゃ！頼むぜ！！探せ！！災厄の根源を！！」

俺は自分なりに魔力をかけて、レイ八で地面を叩いた。  
したら大量の光の筋が四散した。

「なんだ…これは…！！」

ユーノが驚いていた。

でもわるい。そんなこと相手してる時間ない。なんかすごい勢いで  
頭の中に映像がああああつああ！！頭割れるうづう！！

……でもその中から発見。木の根っこに囲まれるひとつの光の塊！  
！なかには…キャプテン！と……あれ？おれにジュエルシードくれ  
た女の子！？

………なんか、ごめん。

「見つけたよ」

「ほんと！？それはよかった………ひっ！」

ユーノが驚くのも無理ないかな。俺もわかるさ。今すげえ切れてる  
もん。

まあ、なんだ。俺のせいで他人を巻き込むなんて…なあ。言語道断。  
反吐が出る。

「封印する」

「こゝこからじゃ無理だよ。近づかないと!!」

「いけるさ。なあ、レイハ」

《Yes・Shooting Mode・Set up!!》

「うそ!!?.....なのはは砲撃型か!!」

俺の声に呼応するようにレイハが姿を変えた。

柄が長くなつて先端の形が変わる。俺がそれに魔力を込めると、杖の横の方から羽が出てきて先端に大きな魔力の塊ができた。

「いけ」

魔力は一直線に飛んで行き、根源にぶつかった。

《Stend by Ready》

「ジュエルシードシリアル?。封印」

再び光が飛んで行き、当たり全体が光で包まれる。  
光の先に残ったのは……

「ほかの人に迷惑かけちゃったな」

俺はうつむいた。確実に、俺のせいなんだ。

「!!..そんなことないよ!!..」

「いや、そのとーりなんだわ。俺、浮かれてたわ。ちょっと舐めてた。俺のせいだ。悪い」

俺が止めればこんなことにならなかった。

「そ、そんな…もとはと言えばボクが…!!..」

ユーノはそう言ってくれるが、悪いのは俺なんだ。舐めてかかって失敗した。いちばんやっちゃいけないことだ。

「なあ、俺決めたわ。次からぜってえ失敗しねえ。だからユーノ。俺に魔法を教えてください」

だから、俺は覚悟を決める。  
これは、ジユエルシード探しは、何があっても自分の力で、自分の意志でやり遂げるんだ。

覚悟（笑） 2（後書き）

……。

次はもうちょっとハイテンションなはず。笑

お茶会（笑）（前書き）

なんというか、今回は何もなかったかなー……笑

閑話休題！！って感じですよ。まったくほのぼの感を出したかった……

……けど無理ぽw

でわでわ、9話？です。どうぞ……！

ちよっと短いかな！？

## お茶会（笑）

深夜

海鳴の街で一番高いと思われるビルの上。一人の少女が佇む。

黒い服に黒いマント。金の長い髪は二つに結えられ、黒いリボンでまとめ上げられている。片手には斧のようなものを手にし、一人夜空に向かってつぶやいた。

「ロストロギアは、この付近にあるんだね」

「形状は青い宝石。一般呼称はジュエルシード。そうだね。すぐに手に入れるよ」

その声に反応したのはただ一匹の大きな……

夜空に遠吠えが響いた。

前回のあらすじ

休日！疲れたからねてようと思ったけどユーノにたたき起こされて起きるハメに！そしたら何故かオヤジ主催のサッカーチームに入れ

られたよー！！  
俺の活躍活躍もあつてチーム勝利！そして知らない女の子から箱もらつた！その箱からはなんか嫌な予感が……まあ、あえて放置！  
そしてその結果街が大樹の巣窟に。そこで気づいた。俺のせいだ！！！！

うー……

「なのは、そろそろ起きようよ」

うー……

「今日は月村さんのように早く起きよう」

うー……

「なのは……」



「わかった、わかったからさあ……あと少しだけ、あと少しだけまっつてくれ」

どうも。高町なのはです。

先日、ジュエルシード封印で失敗した際に言った言葉、思った言葉。

「全て取り消したい！！！！」

「な、なに！？」

だってさあ、なんといつても厨二だよな。

《《《確実に、俺のせいなんだ…》》》

《《《俺が止めればこんなことにならなかった》》》

《《《悪いのは俺なんだ。舐めてかかって、失敗した。いちばんやつちやいけねえことだ》》》

《《《なあ、俺決めたわ。次からぜってえ失敗しねえ。だからユーノ。俺に魔法を教えてください！！！！》》》

《《だから、俺は覚悟を決める。これは、ジュエルシード探しは、何があっても自分の力で、自分の意志でやり遂げるんだ》》

チーン。

再び俺は消沈。

俺が止めるどころかあれ不可抗力だよね。よく考えれば。

なに俺、使命背負っちゃいましたオーラ、出してんだよ!!!!!! 覚悟とか……orz

「チーン。」

「な、なのは？大丈夫？」

おお、ユーノ。今日ほどきみを恨めしく思ったことないよ。  
なんたって厨二の塊だもん……しゃべる動物ってどんな厨二だよ……。

うーうー唸ってたら下の方から

「なのはー！まだかー！ユーノも!!!」

と兄貴の声。

今日は月村邸にてお茶会のお誘い。なぜか俺も加わることになった。

んで、兄貴は俺の付き添い……ってのは建前。  
ホントは彼女の忍さん……月村すずかの姉貴に会いに行くんだ。リ  
ア充め。

「んー！もう少し!!」

ベッドからのろのろ起きて適当な服装に着替える。

こういう時こそ男らしく……!!と、思うのだが……子供の服って  
男も女もそんなに変わらないんだよねー。

とりあえずGパンとオレンジのパーカーで決めてみた!!どう？ユ  
ーノ？

「んー……ギリギリ」

よし。あとで梅干な。

用意が終わった俺は「梅干嫌だア」とか唸ってるユーノを適当につ  
かんで兄貴と一緒に家を出てバスに。  
外を見ると海がきれいに光っていた。

いいこと、あるといいな。

ん？ユーノどうした？えっ？初めてのバスで酔った？  
ちよ、ちよつとまて！！そこは俺の膝の上ツツ！！そこで吐かれる  
とジーンズが……！！  
ちよつ、あつ！！待って！！まつ……アッ

なんとかユーノが吐かずにバスを降りたあと、ユーノの酔いが治ま  
つてから月村邸へ。  
んで月村邸についてインターホンを鳴らすと紫色の髪の女の人が出  
てきた。

「恭也様、なのはお嬢様、いらっしやいませ」

「あ、ああ。お招きいただいたよ」

「ども、ノエルさん。ついでに俺は男です」

この人はノエル・K・エアリヒカイト  
この家のメイド長をしているしっかりもの。すごく信頼できていい  
人んだけどなぜか俺〃女が抜けない。

「どござ、ごちらです」

無視されちった。

案内されて、部屋へ歩いていくと部屋中に大量の猫が。この家の人は捨て猫を見ると拾いたくなってしまいうらいんだ。だから実はこの家の猫はみんな拾い猫。

そこいらへんにいる三毛猫とかもいるが……ロシアンブルーにアビシニアン、セミコビー……なぜ飼い主は捨ててしまったんだろうか。

「なのはちゃん！恭也さん！！」

部屋入ってそうそう呼ばれた。

「だから月村、俺はちゃんじゃ」

「なのはちゃん、いらっしやーい！！」

俺の否定の言葉を完璧に遮ってくれたのはファリン・K・エアリヒカイト

月村（妹）の専属メイド。ファリンさんが「ちゃん」とつけるのは月村（妹）のせいだと思う。大概ドジッ子。

「だからファリンさんも。俺はちゃんじゃ」

「恭也！いらっしやい」

……。

ユ一ノ。哀れみの目はやめてくれ。

さらに遮ってくれたのは月村（妹）の姉、忍さん。

言わずもがな、兄貴、恭弥の彼女。小さい頃からうちに入入りして  
るから家では家族同様の扱いだ。

「お茶をお持ちいたします。何になさいますか？」

「任せるよ」

「俺も」

「承知しました。ファリン」

「了解であります！」

ふむ……ファリンさんに任せて大丈夫だろうか？

「じゃあ、私と恭也は向ここの部屋にいるから」

「はい。そちらにお持ちいたします」

ナニをするんですか？

……なぜか兄貴に頭叩かれました。

そう言っただつかいの二人とメイドさんたちは出て行った。  
それを見届けてから俺も席に向かう。  
席にいた猫をだいて、膝へ。おお、ぬくぬく。

さて、改めまして

「よっ！月村」

「うん！いらっしやい、なのはちゃん」

挨拶って大事だよな。会話の足がかりになる。

「相変わらず兄貴と忍さんは……」

「うん。仲いいよね。お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだよ」

「兄貴は……どうだろ？でも昔に比べると丸くなったのかな。よく笑うようになったかも」

そんな感じで月村と談笑。そしたら横からすごい殺気が……ッッ！！

「アンタたち………なんで無視するのよ!!」

なんだただのバーニングか。

「ああ、なんだ。いたのがバーニング」

「いたわよ!!」

「アリサちゃんおはよう」

「すずかまでっ!?!」

うむ。さすが月村空気が読める。ってか腹黒いなオイ。さっきまで一緒に飲んでいたらろくに。

月村…おそるべし………バーニング涙目じゃん。

まあ、ちよつと可愛いとか思ったのは内緒。珍しい弱った顔。いただきます。

「忘れなさい」



はい。

なぜモノローグをッ!?

そういえば今日誘ってくれたことにお礼を言ってみたら開いた理由を教えてくれた。

なんか最近俺が疲れているように見えたらしい。んで、何か悩んでいるみたいなら話してくれって。

疲れている、ねえ。

実際疲れてはいたけど、授業中寝てるから睡眠時間はバツチリだし…

でも…：疲れてるってあれかな。

厨二発言言動しちゃったあとの1週間はずっとうなってたからな…

…それが原因か。

「月村、バーニング…」

なんというか、悪いことしたなあ……ちょっと感激。  
とか、そんな感じに感傷に浸っていたら

「きゅっきゅっ!!」

とかいう声が。

気づいたらユーノがそこらじゅう這いまわってた。猫のおもちゃみ  
たいになってたよ。  
空気を読め空気を。すっかり忘れてたのは悪いけど!!

「ユーノ！何やってんだよ！」

「アイン、だめだよ！」

ユーノと猫を呼び戻す。  
そしてついでにユーノへ念話

『お前、何やってんだよ』

『だ、だって!!酔いが収まってバッグから出たらこの子が!!』

『念話で呼べばいいじゃねえか』

『なんかいい雰囲気だったくせに!!』

そんなに？

『まっピンクだったよー！』

不覚……月村たちとはそんな関係じゃないはずなんだがなあ……

そこで気づいた。そろそろファリンさんが出て行って15分。お茶とか持ってきてくれる頃だ。入口にいと……

「お待たせしました！お紅茶とクリームチーズクッキーで……ええええええ！？」

やっぱりなっただか。

ユーノはファリンさんの周りをくるくる回る。ファリンさんなぜか自分が回る。

バランス崩してたおれそうに……あ、紅茶が。

「ととと」

「セーフ……」

俺がファリンさんの体を、月村が紅茶トレイをなんとか支えて救出した。ちなみにバーニングは優雅に紅茶のんでた。なぜ動じぬ。まあ、なんとか救出できたのは不幸中の幸いだったのかな。

「なのはちゃんごめんなさい!!」

紅茶頭からかぶったんだけども。

どーすんだこれ……洋服とかビチヨビチヨやないか……

迷ってたらず月村が声を出した。

「なのはちゃん、洋服濡れちゃったね……あ、そつだ!!私を着なよ!!」

……What's are you saying?

お茶会（笑）（後書き）

続きは明日！

多分、ここから原作をさらにブレイクします！！多分！！

感想……いつもありがとうございます！

猫×猫Ⅱ着せ替え人形（笑）（前書き）

あ、タイトル適当ですww

さて、完全にこっから原作ブレイクします！

もはや再構成じゃなくなってますので、無理な人はバック！！

でわ、どぞ！！

次は……ちよつと考えながらなので遅くなるかもです

## 猫×猫Ⅱ着せ替え人形（笑）

前回のあらすじ

ジユエルシード封印の失敗から一週間！失敗を心に刻んだ今日このごろ！

お休みになったので月村邸に呼ばれました。相変わらずの猫屋敷…  
…すばらしい。ユーノ君は猫が怖いようですよ。

そしてユーノのせいでドジっ子メイドファリンさん大ピンチ！！救出はしたけど俺の服が紅茶でビチヨビチヨ…え？月村なんて言っ  
た？

「なのはちゃん、洋服濡れちゃったね…あ、そつだ！！私を着  
なよ！！！」

なにをおっしやってるの月村さん。

「すずかお嬢様の…なのはちゃんならサイズも合いますね！！！」

おっとファリンさん！！そのセリフは男として聞き逃せない！

男の俺が女の月村と体格が一緒だと！？

『その通りだと思っよ』

だまらんかユーノ。

「はい、じゃあなのはちゃん並んで……よし！若干すずかお嬢様の方が身長高いですけども……大丈夫でしょう！ちよっと待っていてくださいね！スグ持ってきてますからー！」

……………え？

嘘！？嘘でしょ！？確かに俺は低いほうではあるけど……気にしなかつただけで月村の目線が上にツツ！？

「月村、身長幾つ？」

「135ぐらい……かな？」

oh….

平均よりお高いんですね。ちなみに俺は133でした。The 平均！運動する人ほど背が高くなるらしいんだけどなあ……運動すると骨に刺激が伝わって背が伸びるんだってさ。でも……あれ？

『運動しすぎは背を伸ばさないよ？』

マジかー！



して10分後

「これなんかどうよ!」

「こつちにしようよ!」

あはは。何故か着せ替え人形になってます。

『なあ、ユーノ。なんでこんななってるんだ?』

『ボクにきかないですよ……でも、大変でしょ?ソレ。ボクも桃子さんにやられるからなあ……気持ちはわかるよ』

ちよつとユーノを見直しました。

事の発端はファリンさんだった。

.....

「なのはちゃん！どれにします!？」

と言って戻ってきてくれたのはいいんだけども

「ファ、ファリン？なんでそんなに!？」

「いえ、どれがいいかわからなかったもので……」

両手一杯の洋服の山。  
もちろん女物だよ？

「そんなに持ってきてどじするの……はあ……」

「あ、あはは。ありがとう、ファリン。じゃあ、俺は……これでいいぞ」

そう言っただけで俺が取り出したのはシンプルな長ズボンとT・シャツ。

まだ小3とかでよかった……男物も女物も大差ない……そう、安堵しかけたら

「何言ってるのなのはー!」

と金髪ツンデレお嬢様が声を出した。  
なにがどうした。紅茶飲んでるよ。

「せっかくファリンさんがたくさんのお洋服を持ってきてくれたんだから、もっとちゃんと選びなさいよー!」

「……なんでさ。いいじゃんか。これ、シンプルでよくない?」

もっとも月村の服を着ることに抵抗がすごいんですけどー!?

「よくない!! そうねえ……これなんかどうかしら?」

そういつてとりだしたのは……

「なんでワンピース!? 俺男だよ!?!」

完全に女物じゃないか！

簡素なズボンやT・シャツはまだしもワンピースはまずい。女物の代名詞！スカートに次いでまずいものだと思うよ！？

「男なのは知ってるけどその顔で言われてもねえ……」

くそづ。返す言葉もない……

と、ここで黙っていた月村が声を出した。

「あーじゃあこれからはちゃんのパッションショーやろづ！

」？

えっ

「いいわね！ー！そうしましょづ！ー！」

えっ

「じゃあ鏡持ってきますね！ー！」

えっ

『「愁傷様」』

『返す言葉もございません』

そして今に至る。

「あ、これなんかどう!？」

「やめろ!?!チャイナ服はやめてくれ!?!」

「あ、じゃあこれは?」

「メイド服はもっとだめええええ!?!」

心労は募るばかりである。

「もう、なんでもいいからはやくしてよ!?!...」

実は俺、今カーテンにくるまってパンツ一丁なんだ。寒い。

俺の声に二人はキョトンとして目を合わせる

「あ、あはは。ごめんねなのはちゃん。ちょっと舞い上がったちゃって……」

「その……悪かったわ!」

バーニング……謝るのくらいできるよつになれ……

「なんでもいいから早くしよつ。ね?」

とついでに落ち着いた  
が

「どつしてこつなつた」

俺が着ている服

まあ、上は普通なので割愛。  
下、スカート。

「スカートじゃなきやだめ?」

「だめっ!!」

くそう

いいじゃんズボン

「それにしても……あんた本当にスカートとか違和感なく穿くわねえ……」

「ほんと。なのはちゃんなんか穿きなれてる……?」

ビクッ!!

まずい!この二人に知られたくはない!!いや、二人に見られているが覚えていないだろう!!

スカートを履き慣れている……否定はできない。なぜなら翠屋の悲劇があるからだ!!

翠屋の悲劇……簡単に言っ飛ばせば俺が小さい頃店を手伝っていたときお母さんが生み出した悲劇だ。

その頃の俺は……まあなんとというか、仕草とかも女ぽかったものでまあ、つまり。メイド服を着せられていたわけだな。

そして実はその姿をこの二人は見ていたりするんだ……店に来た二人をなんとか捌いて店の奥に逃げたのを覚えている。

「そそそそんなわけないよ!」

「あやしいわよ、なのは。一体過去に何があったの? 答えなさい?」

「なにもねえって!」

「なのはちゃん。目を見て」

「あう……」

ごまかすと同時にユーノへ

『Help!! 猛烈にHelp!!』

『ん……どうしたの?』

……こいつ……いつの間にか猫と仲良くなって戯れてやがる

『過去がばれそう。なんとか二人の注意を引くか俺をこの場から逃げさせてくれ!』

『えー……今ちよつと離せないし……それに、なのはに仕返しするチャンスじゃない?』

なん……だと?



『俺がいつお前に嫌がらせを!!!?』

全然身に覚えがないのだが!?

『今まで色々なことやられてきたからなあ……ほら、ボクのこと忘れて攻撃よけたり、ボクのことわかっててベッドへダイブしたり……』

…』

あ、なんだろう。すごい身に覚えあります。

『だからなーもうちょっと苦しんでもらおうかなー』

くっそう!…!!

「さあ、なのは!答えなさい!」

「答えて、なのはちゃん!」

「うっ……えーと……その……」

絶体絶命の大ピンチ!

もうだめか!と、なりそうな時に

ピキッ

と頭の中に嫌な感じが

『ユーノ、今のって』

『うん。ジュエルシールドだ』

『くそっ……目の前の恐怖で体が動かねー……!!どうすれば……!!』

『……しょうがないなあ』

そういつてユーノがどこかへ走っていった。なるほど。そういう作戦ね。

だがユーノ。

イラッ

「あ、あれ!?!ユーノ!どこいった!?!」

「……へっ?」「」

「ユーノが何か見つけちゃったみたいだなー!ちょっと俺探してく

る！！」

「あ、ちょっと待ちなさいなのは！！」

「だーいじょーぶ！俺一人で見つかるからお嬢様方は座って待ってなさい！！」

なんとか脱出完了！！

少し離れた雑木林でユーノと合流した

「あ、なのは！大丈夫だったたたたたた！？」

「クソ野郎！！もっと早く助けるよ！！！」

そして梅干。

痛そうで何よりだよ。

「いたたた……はあ。とりあえず結界張るよ。最初にあつた時みたいな空間を作るよ。ボクの得意な魔法なんだ」

もうなんでもやってくれ。得意とかどうとか興味ないからさ。

ユーノの真下に魔方陣ができ、辺りが灰色になる。

ユーノの話では月村邸全体は覆ったそうさ。

「ジュエルシード!! 発動するよ!!」

「おう!!」

したらジュエルシード発動。

眼前に広がる青い光。そこにあらわれたのは

「にゃあああああああ」

巨大な

「猫?」

「猫だねえ……」

……なんという。

ジュエルシード発動と思って張り切ったのにとんだ出オチ……

なんでこんなふうに……あ、なるほど!!

「大きく、大きくなりたいっていう願いがゆがんで叶えられたのか

「!!」

フツ！ユーノの出番破壊！！  
口を開けっ放しのユーノくん。勝った！！

まあ、封印するに間違いはないか

「はあ、さっさと封印するぞ」

そうやって俺は歩いて猫の方へ向かう

「ちょ、ちょっとなのは！？ジャケットは！？」

「いらないだろ。猫だし。撫でてれば隙もできるって。ソコを付いて封印！」

「踏み潰されたりしたら！！」

「んなことねあって」

そうやって猫のところへ

「な、猫！」

「じゃああああお！」

ふむ……

こいつ襲ってこないかな

！！そうだ！！

「どうだユーノ！！猫に乗ってみた！！」

背中で手を振ってみた。

乗り心地最高！！毛はふかふかだし、月村の手入れが入念なのか、匂いがすごい、いい！！

「ちょっと！！危ないよ！！落ちたりしたら！！」

「落ちねえって」

まあ、遊ぶのはこのぐらいにして封印するか。  
そう思って猫から降りようとしたら

「えっ？」

目の前に金色の光が襲ってきた。

え？ちよ、俺今ただの服……！！

俺はそこで完全に意識を失った。

猫×猫Ⅱ着せ替え人形（笑）（後書き）

どうでしょ？

まさかの勝負なしな感じですよw w

先は俺もまだ知りません だって構成中なんだから！！



ここは名も無い膝の上(笑)(前書き)

いやあ、すみません！風邪ひいてましたwってか現在進行形ですw w

さてさて、半分原作ブレイクと来ているわけですが、なんだかんだで原作へ軌道修正しちゃいそうです……(´・・´)

まあ、仕方ないのかなあ、とかは思ってますね。

ということでも半分原作ブレイク！ってことで、無理な人はバック転よろしく……！

でわ、どぞ……！

ここは名も無い膝の上(笑)

前回のあらすじ

月村邸にてお茶会

開かれるファッションショー

現れる巨大猫

遊ぶ俺、撃たれる俺

気を失った俺

ん、んん……？

目を覚まして見えたのは灰色の空

頭に感じるのは柔らかくほんのり暖かな感触

音はまだよく聞こえない。

再び襲い来る睡魔に身をゆだね目を閉じようとした瞬間に、視界にひとつの顔が現れた。

「気がつきましたか？」

「おわっ！！」

だ、誰！？

驚き、バツと身を起こし、振り返る。

そこに見えたのは目はぱっちり、まつ毛もすっかりとした女の子。  
見た事無いなあ……誰だろう？

と、首をかしげていたら

「ごめんなさい!」

と頭を下げられた。

どゆこと？

「えっと、私がおなたを撃っちゃったから……」

撃つ……!!?

あれ？それ以前になんで俺は倒れていたんだっけ？ちょっとあらず  
じを見てみよう

月村邸にてお茶会

開かれるファッションショー

現れる巨大猫

遊ぶ俺、撃たれる俺

気を失った俺 イマココ!

「あー！！！！お前が撃つたの！！！」

「まさか人がいるとは思わなくて……」

まあ、確かに猫の上に人がいるとは思われないわな……

「ってだからって撃つなよ！！猫だって生きてるんだからな！」

「あう……」

「まったく。月村家怒らすとやばいぞと、ここで気づいた。」

「なんでこの子ここにいるんだ？ってか撃つってことは、魔法使うひと？」

「ってことは……」

「命の危機！？」

「バツと立ち上がって距離を取り、女の子をジロリ……とここで視界が揺れた。」

「あれ？力が入らな……」

「危ない！」

気づいたら女の子が俺を支えてくれました。どんだけ早いこの子にしても……ううむ。しばらく動けそうにないな。

「大丈夫、ですか？」

「あー悪い悪い。いやあ、まさか俺のほかに魔法を使う人がいるなんて思わなくて……」

「あ、はい。私は、この世界の住人ではないので……」

「そうなん！？……って、あー……俺の知り合いもそんな感じだわ。そこいらへんにフェレット……？みたいなやついなかった？」

俺は周囲を見回した。  
いつもならすぐに「なのはー」ってやってくるんだけど……こないね。

「フェレット……もしかしてアルフがくわえてたやつかな？」

「アルフ？」

「はい。私の……使い魔……ペット、いえ、家族です」

ふうん、家族ねえ

「形態は？」

「狼ですが……」

ユーノがやばい。

女の子がアルフを呼んでくれてユーノが見つかったよ！やったね！

「いやあ、悪い悪い！まさかあんたの使い魔だったなんてねえ！こ  
つちにも美味しい獲物がいると思ったんだけど」

「アルフ！ちゃんと謝らないとだめだよ」

「いいっていいって。使い魔じゃないし」

「よくないからね!？」

でもユーノはなんかスタボロです。……まあ、ずっとくわえられ  
てたからなあ……



『フォトンランサー』

と魔法を放ったところ

『えっ?』

あなたにあたったというわけです。

- - - - -

「えっ!? みじかつ!! 短い!!」

「えっ? でもこれだけですし……」

「もっとなんかあるでしょ!? 何のために反応を求めたのか!!」

「くそ!! 俺は初撃でやられたのか!!」

「突っ込むところそこなの!!?」

「今度試合を申し込もう」

「そんなのやめて!?!」

「いいですね。また今度」



「君も認めないで!!」

ふむ。ユーノ君はなかなかツツコミが上達したようです。

「誰のせいだよ!!」

モノローグに突っ込み……まさかの6連続!!?

「もういいよ!!」

7連続!?

……まあ、遊ぶのはここまで。

「で、君は何探してるの?」

「あ、はい。あるロストロギアなんですけど……」

「ロストロギア……ユーノくん。ロストロギアとは?」

残念ながら魔法歴3週間(かな?)なんだ。用語とか全然覚えてない。仕方ないとは思っけどね。正直捜し物してるだけだし……ん?探し物?

さがしもの……サガシモノ……探し物……探シ物……！！！

「ロストロギアというのは……」

「探してるのってジュエルシールドか……！」

ユーノの声を完全に遮る。ユーノのジト目が心に刺さった。でも仕方ないじゃん。思いついちゃったんだから。

「……？どうしてそれを？」

ホレ、ビンゴ

「いやなんとなくな……」『……で、どうする？』ユーノ

『えっ！？』

えっ、じゃねえよ。

『いつのまに会話と念話を同時に使えるように……』

ユ一ノくん。褒めるのは心の中で……ってこれ心の中の会話か。照れるね……

『かぶったぞ。探してるもの』

『うーん。そうなんだよね。ボクとしては危険だからすぐにでも集めて封印したいんだけど……』

！！！！ 女の子が不安 そうな顔で  
こちらを見つめている！！

『あんな顔されちゃうとね……』

『だな。伏せとくか』

まあ、なんといいですか。男の性ともいいいますか。女の子には弱いのです。ちなみにバーニングは別。奴は女の子ではない。バーニングだ。

俺らのことがバレるのも時間の問題かもしれないけど、持っているとバレたら思いっきり撃たれそうだしな。

「あ、いやいや。たまたま、ね。集めてどうするの？」

「それは……言えません」

「そっか」

なにか深い事情がありそうではあるけど、怪しくもある。  
こつこつ時は落ち着いた行動が必要なんだ。

「まあ、なんだ。手伝えることがあったら言ってくれよ。会えるかわからなけど、何か力になれるかもしれない」

「えっ……でも」

「いいのいいの。素直に甘えなさいな」

「……………はい」

おずおずと頭を下げる少女。なんともまあ、品行方正。育ちがいいのかしらんが、丁寧な子であった。

「ね、ちょっと気になったんだけどさ」

と、こつこつでユーノが声を出した。

「どつした？ユーノ」

「なんでまだ膝枕なのかなあああ？」

「いやあ、気持ちよかった。ありがとね」

「あ、はい」

「良かったねえええ??？」

「な、なぜ怒っていらっしや……ブペッ!？」

股間に来るあらぬ衝撃と緑色のユーノの攻撃で俺は意識を失った。

目が覚めるとそこはベッドの上であった。

「目、覚めた!?!?なのはちゃん!?!」

ん？月村？

「なのはちゃん、はずれの森で気を失ってたの……！もう、私心配で……！！！」

「ああ、心配かけたな……」

起き上がって月村の頭を撫でる。

なんともまあ、サラサラの髪の毛で……

「バーニングはどうした？」

「ここに居るわよっ……！！！」

「おお！いたのがッ……！！！」

突然ガツとされた。

「もう……！一人で大丈夫なんて嘘じゃない……！何やってるのよ……！！！」

思った以上に泣いてしまっていて俺もびっくりだ。

涙を貯めたバーニングは……ごちそうさまです。

「二人とも、ごめんな……足でも滑らしたのかな……ハハハ……」

笑い事にならない量のプレッシャーがかかってくるのであります。  
さっきの品行方正の女の子が懐かしい……

「くそっ、ユーノめ……」

そう呟いた俺の言葉は誰にも届かなかったようです。

家に帰ってユーノといろいろ相談をした。

内容は

- ・ユーノへの処罰
- ・ユーノの扱い方
- ・女の子について

ユーノはとりあえず梅干×もみじ×シッペという微妙に痛い仕置き。

まあ、兄貴に事情を説明した上で呼んでくれたのは褒めておこう。だが兄貴も兄貴だと思う。ユーノが「やりすぎました」と事情を説明したら

「いいよ。なのははうたれ強いんだ」

だなんて。ひどいよ。まあ、騒ぎにできなかったのは嬉しかったけどね。

それでもどんなおとも股間は無理です。

さてさて

女の子についてだが、俺が意識を失ったあと、猫のジュエルシールドは封印して持っていったらしい。

とりあえずはユーノと同じ世界の同じ住人ということが分かっていて、求めているものはジュエルシールド、敵対性はない、ということ。まあ、自ら敵になるほど俺も馬鹿じゃない。しばらくは俺もジュエルシールドを持っているのは伏せておこうかな……とか思ってるけど……いつかは対立しちゃうんだろっなあ……

まあ、仕方ない！！その時はその時だ！！

「と、いうことで、当分の目標はジュエルシールドと魔法強化と行きたいと思いますー！ー！」



「え？魔法！！？ついに訓練する気になったの！？」

「女の子の魔法一発で倒れるようじゃ男じゃねえ……！！なに、いつか勝つさ」

「そっか……ところでなのは」

「ん？」

「いつまでその格好？」

「あ」

気づいたらまだ月村家の服でした。

あれ？俺この服装で街歩いたの？

あれ？俺女の子とこの格好で会ってね？女の子って俺のこと女って思ってる……？

「多分ね」

うわあああああ……！！

ここは名も無い膝の上（笑）（後書き）

どうでしょう!？

まあブレイクってほどブレイクじゃなかったかもしれない。

まあ、こんな感じで少しずつ原作と違ってくるといった感じですよ。

こんな感じでよろしいかわかりませんが……

何かアドバイスあったら欲しいところですね。

でわ、次回!!

感想など待ってますw

温泉 (癒) (前書き)

遅れました！

なんとか更新！明日から学校だから更新ペース落ちちゃっけどあしからず。

さてさて、温泉編でござい。

でもなのフェイ関係良好だから軽く原作ブレイク。まあ、そんなブレイクされませんけど (笑)

では、どうぞ！！

温泉（癒）

前回のあらすじ

月村邸でぶっ倒れて、目が覚めたら女の子。

どうやら撃たれて一撃でやられたらしい。一撃で落とすとかどんだけ強いの……

ジュエルシードを探しているらしい彼女を手伝うことを決意。でも俺も探してるんだよなあ……

この間の月村事件からはまあ、数日たったとき。魔法訓練厳しいです。あ、でも飛べるようになりました！すごいね飛ぶのって！風が気持ちいいよ！ミスって落ちた時の頭の痛さは尋常じゃないけどね。あといろいろ魔法ゲット……ふふふ。ユーノには負けなくなったぜ……。

話は戻して

今日は連休！

いつもなら年中無休の翠屋も連休は休んだり云々。つてわけで家族旅行にきています。今回はうちの家族だけでなく、バニングス家からバーニング、月村家から月村すずか、姉忍、その他メイド2人も参加。二台の車で、ひとつの車は高町家+ちびっこもう一つが兄貴バカップルとメイドさんだ。

あ、知ってたか？バーニングは本当はバニングスって言うんだぜ。言いにくいよネ。

んで、近場で2泊。温泉で疲れを癒す寸法ですよ。

ちなみにユーノは姉貴に捕まっけていてずっと手の中……酔わなきゃいいけど。乗用車って結構酔うんだよね。

そんなことを考えてたらユーノから念話が来た。

『なのは』

『ん？』

『旅行中は、ゆっくりしなきゃダメだよ？』

なにをおっしゃるかこのフェレットは。

せつかくの休日。休まないで何をする。確かに、最近魔法を覚えるのがわりと楽しいから頑張っちゃアいるが、そんな頑張ってるわけでもない……はずだ。

『この間も頭から落ちたし……』

『わかってるよ。人の失敗を繰り返すな』

耳タコつす。

最近見つからないジュエルシードのこととか、黒い魔導士とかのこと考えすぎてるから、休むのもちようどよかったかもね。

『最近見つからないジュエルシードのこととか、黒い魔導士とかの』

こと考えてるんだらうけど、詰め込み過ぎると体に毒だよ』

なぜ一字一句間違えずにモノローグが読めたんだよ。

『作者がコピペしたからだよ』

『あ、コラッ！メタ発言禁止！！』

ったく。ユーノめ……。

「わあ！緑がいつぱい！」

「本当だねえ！」

まあ、隣にいらっしやるお嬢様二人を見ていますと魔法のことなんか考えたくなりますからね。今日はゆっくり……どうしたユーノ

『ウプツ、酔った』

メタ発言のバツだろ。

さて、長かった車の時間もおしまい！やってきました海鳴温泉！！車から降りて、みんなと合流。荷物を持ってチェックイン！！

「はい。ご予約承っております、高町様。……ん？お子様は男の子が一人、女の子が二人と聞いていましたが……」

「あ、こいつ男です」

「……し、失礼いたしました！」

……

『どんまい』

くそづ。

.....

さて、さっそく温泉へ！！

と、こじで議論に

「ユーノはこっち持ってくって」

「あんたいつも愛でてるんだから、今日はユーノもこっちなの！」

『ボクはアリサの方へ行くよ』

バーニングがユーノを譲らない。

いつもは姉貴が世話しているわけですが、今日ぐらい俺がやってやると思うんだ。

なのに……バーニングが邪魔するのです。ユーノがエロいのです。

「うちのペットだ。俺が世話するよ」

「どうせやってるのお姉さんでしょー！」

『ね、なのは。アリサの方へ行くから』

あ、バレてましたか。

しかたない。今日ぐらいは……いや、今日ぐらいは俺がやるしかない。

「いいからこっち渡しなさいー!!」

「いって。遠慮するよ」

『ボクはアリサの方がいい』

ふむ……



「まあ、ユーノもこう言ってることだし、ここは任せなさい」

「何も言っていないじゃない！キューキューいってるだけよ！」

『いやあああ！』

そういつてユーノをつかみどり。

ユーノ。一人だけいい思いはさせんぞ。ってか「いやあああ！」はさすがに……男としてどうよ。

ということでも男湯へ。

む、兄貴またでかくなつたな

「なのははまだまだだな」

「こらこら、成長期なんだから」

このプレイボーイめ……まあ、仕方ないかな

「それにしても……その顔だとホント女の子みたいだなあ……」

「ジロジロ見ないでよ。俺だって悩んでるんだから」

「まあ、気にすることはないだろ。ちゃんと男の顔立ちになるさ」  
「ならいいけどさ」

くっそう。ちいさいのは悲しいよね。男としてBIGになりたいんだ。まあ、人のレベルじゃないと嫌だけどさ…。  
あ、ユーノが鼻血出しながら逃げてった。なんで逃げたんだよ……

「あれですか。兄貴はこのあと忍さんとしっぽり……?」

あたまゲンコされました。  
したら隣の女湯の方からキヤー!!!って。バーニングの声があつたんだろ。

『ユーノ!!!?血だらけでどうしたの!?!って鼻血!?!大変!?!?』  
『なのはね!?!なのはなのね!?!?』

……

「おまえも大変だな」

「なにをいうか」

このプレイボーイめ

風呂を出て、アリサに一発やられたあと、みんなで旅館探検へ…！  
温泉のあとといえば牛乳とか飲みたいところだが、卓球というのも  
ひとつの手でもある……お土産を見てもいいし……実に迷うところ  
だな。

と、廊下を歩いていたら

「ハアアア？おチビちゃんたち」

と、声がかかった。

目の前にいたのはナイスバディなおねーさん。なんとも浴衣が似合  
っているようで似合っていない。ううむ。髪が濡れていないからか、  
色っぽくねー。

とりあえず全員の頭にクエスチョン。誰だろ？あつたことないんだ  
けどなあ……

「君かね？うちの子をアレしちゃってる子は？」

「俺か!？」

何を言っているかこの人は

「アレって、ナニ?」

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンチョに見えるんだけどねえ?」

「シカトか」

なんともひどい人だな。

でもアレってなんだ……やっぱりナニとナニが繰り出すアレか!?!? アレなのか!?!?

と、唸っていたらずっとバーニングが出てきた。怯えてるようにも見えたのかな??

「なのは、お知り合い?」

「ここまでのナイスバディは知らないな」

ゲンコされた。

「この子、あなたを知らないそうですが。ドチラサマですか?」



「だろー。このユーノ君、なんと淫獣なんです」

『誰が!?!』

ユーノにひっかかれた。

女湯に走っていった奴が何を言うか。

「あ、あはは、撫でてもいいかい? ほら、よしよーし、なでなでー」  
『今のところはこれくらいにしてやるよ』

……!?!!

こいつ……!

『子供はいい子して、おうちで遊んどきなさいね』

……何を言ってるんだ?

『オイタがすぎると、ガブツと行くわよ?』

ガブツて…動物かよ…

ん? 動物…それにこの声……!!

『アルフさんかよ』

『やつほーお二人とも。おひさー』

念話の声的にアルフさんでした。なぜ気づかなかったんだろう。俺

『何やってるんすかこのナイスバディ。つてか脅かさないでよこのナイスバディ。つてか人になれたんだねナイスバディ』

『どうだい？この容姿。興奮するかい？』

『小学生に何期待してんのさ』

たしかにおっぱいすごいけど別に欲しくない。俺男になるんだ……！！いや、俺今男だ！！

『ユーノは淫獣だったのかい？』

『違うよ！！』

『女湯行ったじゃん』

『何か問題が！？』

『むしろ問題しかねえよ』

やべえ、こいつ真性だ。真性の変態かもしれない。

『あんたたちは何しにきたんだい？』

『旅行だよ旅行。たまに温泉に来るんだ。うちの家族。アルフさんは？』

『ん、ジュエルシードを探してるってところかなー。このへんにあるんだよ、ーっ』

なんと。俺の平穩は続かないのかよ。

『いまフェイト……ああ、この間の黒い魔導士、あたしのご主人様が探してるよ』

『……マジかよ……まあ、後で手伝うな。いまは遊ばせて』

『悪いねえ。ピンチになったら頼むよ』

まあ、つかの間の休息を楽しみますかね。  
一回ため息をつく。

「ど、どうしたのかしら……二人とも固まっちゃった？」

「な、なのはちゃん？」

あ、やっべ。俺ら念話で会話してるんだっけ。



『おーい！この話また後で！！多分夜になると思う！』

『悪いねえ』

「あ、ごめんごめん。あんまりに気持ちがいいものだからさー！」

「お、おう。問題ないぞ！？」

「それじゃあ、あたしはこの辺で〜。もう一風呂行ってきますかね

」

それだけいうとアルフさんは歩いて浴場の方へ向かっていった。  
するとバーニングが

「なんなのあいつう！」

とか。

「まあ、悪い人じゃなかったよ。面白かったし」

「ビュッがよ……」

あ、これ念話だったしね。わからないか…

「今のナシ！ナイスバディだったし」

「ふんっ！」

「あだっ！」

なんでもみじされたか。俺は別に興奮したりしないっていった…  
あ、これも念話か。

「まあ、いいじゃない。な、卓球行こうぜ、卓球！」

「いいわ！望むところよ！！！」

ふふふ！負けねえぞ！！

そして俺らはお土産屋や卓球をしに、移動した。

ちなみに卓球は謎の盛り上がりを見せた。

月村は謎の動きでニコニコしながらボール拾うし、バーニングはまあ、普通につまかった。俺？気づいたらバク転してたよ。

疲れに疲れた俺らはそのまま就寝。まあ、トランプとかUNOとかみんな交えてやったけど。俺が二人と同じ部屋でいいのか疑問だった。俺も男よ？襲ったりしちゃうよ？うガーって。って言ったらバニングが顔真っ赤にしてビンタしてきた。ウブなんだから。

今日みたいに、明日も何もなければいいなーとか思ってた就寝したけど、アルフさんによるとジュエルシードがあるらしいんだよね。いつ頃来るんだろうか？

温泉 (癒) (後書き)

まったり書いたから誤字多いかもごめんなさい。気づいたら直します。

本当はこれの前に訓練学校編書こうと思ったんだけど…案が出なかったorzまあ、何個かあるんですけどね。またいつか。

では、感想など待っております。

また次回に。ノシ

お知らせ

どもも。授業中なこーこうせいです。

最近ね、何かけばいいか分からんとです。話の展開が思い付かんです。

ということ更新遅れるかもしれません……

せっかくPV延びてきたのに……

まあ、ゆっくりやらせて頂きます(笑)

あ、少し補完……

は、ネタばれになるからやめときましょ(笑)

まあ、完結はしますよ(笑)無印は必ず!! A・Sはわかりませぬ。いつかアンケートとりますけど(笑)わかりませぬ(笑)

まあそういうことですので、よろしく願います。

喧嘩売ってみた(笑)(前書き)

今回は戦闘回の直前ということなので少し短め？  
ということでは戦闘回。

そして今回は非常につまらないです。

今回は戦闘がメインです。なので次話に期待!!ということではW W

まあ、とりあえず。どぞ!!

## 喧嘩売ってみた(笑)

前回のあらすじ！

連休ということもあって家族＋バーニング月村含めて温泉へ！

温泉入って卓球して……いやあ、満喫しているでございませう。そんなところに現れた意味深な女……訳がわからない

と、思ったらアルフさんでした。なんかこないだの子も来てるらしい。ああ、俺の平穩はどこに……

「早くジュエルシードを渡して」

目の前にいるのは大鎌を持った黒い少女。いや、この場合は死神とでも言うべきか。

まだ、何をしているわけではない。なにもなく、ただ見つめられているだけだというのものすごい量の殺気とプレッシャーが自分に降りかかる。それを受けたなのは首筋にたらりと汗を垂らし、乾いた唇をぺろりと舐める。身構え、いつでも動けるように構え、目の前で魔法を展開する相棒に話しかけた。

「どうしてこうなった？」

「ボクに聞かないでよおおお！……あぶなっ……！」

話は少し遡る……

.....

夜

寝てからどれくらい経ったのだろうか？わからないけど、変な違和感を感じた。

「んん…？」

『なのは！ジュエルシードだ！』

どうやらジュエルシードらしい。この間の黒い子が来ているらしいから大丈夫だと思うんだけど…

『さあ、行く準備を！！』

いかなくってはならないらしい。

「はあ。休みぐらい休ませてくれよ」

『仕方ないよ。さあ、行こう！』



封印したりするのは俺んだけどなあ……とか思いながら、布団から出る。冬ではないので、別に出たくないわけではないが……ううむ、布団の魔力は素晴らしい。

眠り眼ではあるが、意識ははっきりしている。よし、問題なく行ける。

行こうか、ユーノ、と話しかけようとしてふと気づく。

「ユーノ……どこだ？」

ユーノがいない。行こう！と言っておいてどこにもいない。

『ココだよー！』

と、なんとなく聞こえた場所の先には

「すー……すー……」

バーニングが

「おまえいつからバーニングに変化できるようになったんだよ」

『手だよ！手の中……！出れないんだ……！』

とかいいながら顔は満更じゃないじゃねえか。このやろつ。  
こいつなんだかんだで俺だけに行かせる気だな？

「おまえ……策士か」

『そんなことどうでもいいから！』

どうでもいいとは。苦労するのは俺なんだよ。

『ボクもあとからいく！なのは先に向かって！！』

「うわぁ、こいつ絶対後から来て、「あ、終わった？お疲れー」って言う気だ」

さいてーだな。

まあ、このまま放置してもいいんだけど、ちよいと不安なのは確かなので

「しゃーない。先に行く。絶対来いよ」

『ぜったい！！』

と、先に反応に向かうことに。

あ、いいこと考えた。せつかくユーノがいないんだ。ちょっと遊んで。」  
そう言つて俺はこっそり旅館を抜け出した。後ろから『ぐえー!!』  
つて聞こえたけど、多分バーニングに握りつぶされたユーノだから  
気にしない。

反応の方に向かうと例のごとく世界は灰色に。まあ、だれかが居る  
んだらうなあ。

「レイハ、せつとつぷ」

《……Set up?》

なぜに疑問形。

とりあえずいつもの女の子フォームに変身！スカートってわけでも  
ないけど、違和感は否めないね。

さて、目の前にいるのは昼にあったナイスバディと黒い女の子。た  
しかフェイトって言ったっけ？

「子供はいい子になって、言わなかったっけ？」

?????

ああ、そういっついで

「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ！！危険なものなんだ！！」

ノリって大事だよね。

「えっ？この間…」

「さあ、ねえ。答える理由が見当たらないよ？」

「アルフ！？」

あ、このキャラ設定あなたの主人知らないのね。

「それにさあ、親切に言ったよね？いい子じゃないとガブっていきよって」

「なんだと！？」

俺は食べちゃダメだ！！腹壊すぞ！！ユーノは食物連鎖に合ってるからいいけどさ。

するとアルフさんが遠吠えを上げながら犬？狼？に変化した。服を破りながら。ああ、洋服がもつたいない。

「その服を誰が直すんだい」

「あ……」

忘れてたんかい!!

にしても……かっこいいな。

「アルフさんやっほー。お昼ぶり」

「やあやあ、なのは。元気かい？」

「えええっ!？」

まあ、突然仲良くなったらそりゃ驚くよね。さっきまで殺気バシバシ飛ばしてたのにいきなり仲良く話したら驚くわ。それにしてもその格好でその声はなんとも気持ち悪いよ。アルフさん。人の形に戻りなさい。

「そっ?」

そういつてアルフさんの体が見るみる人形に……はっ!!

俺はハッとなって顔を両手で伏せる。指の股から見えているのはお約束。

「どうしたのさ？……ははーん、あんたあたしが裸になるとでも思った？残念！！」

おねーさんに興味はないと言っておろうが。

「いやあ、それにしてもホントに来てくれたんだねえ」

「約束だからな」

「……………」

ついにだまっちゃったよ主人様。……あ！！自己紹介してないや！

「ん、紹介が遅れたね。この間はどうもご主人様」

「あ、はい……ってご主人様って何！？」

いや、アルフさんのご主人様でしょ？うん。間違っていない。

「あ、俺は高町なのは。ご主人様は？」

「え、あ、フェ、フェイト・テストロッサ」

「ああ、外国の方なんだね。ご主人様は」

どつりで金髪赤目なわけだ。でも赤目って似合う人なかないないよね〜……って青目の俺は言えないか…

「あの…名前言ったんだからご主人様はやめて……くれるかな」

ずきゅーん。らぶずきゅーん。

顔赤くしてそのセリフは何か反則だぜ……いや、実のところ何も来ないけどね。金髪とかバーニングで十分。

「だな、よろしくテストタロツサ」

「はい」

……

なぜか流れる沈黙。……ジツと見られる視線……耐え切れませぬ。なにこの放送事故。

つて、ああ、忘れてた。本命はジュエルシードだった。

「なあ、ジュエルシードは？封印した？」

なんだかんだで危険なのは当たり前なので。この間みたいに木が出てきても困る。

「あ、はい。あなたが来る前に……」

え。あれ

「じゃあ俺が来た意味は？」

「ないねー。お疲れっ！」

地面に手と膝を付く俺。

マジかよ、もつと寝れたじゃん……ってかなんで夜に発動するかなあ……

「あ、で、でも！来てくれたのは、嬉しかった……よ？」

「……！！なんだこのいい子は……！！」

「自慢のご主人様です」

ありがとう！テストロッサー！！  
それにしても……



「このまま帰るのも面白くないなあ……」

せっかく起きて、バリジャケまで着けたんだ。どうせなら何かして  
いきたい。

俺の予定ではジュエルシードが発動しててこの間の訓練の成果を存  
分に見せるはずだったんだけどなあ……

！！！そつだ！！

「ね、ひとつ提案があるんだけどさ」

「「??.?」」

提案する俺の言葉を聞き、アルフとテストアロツサの頭にクエスチヨ  
ン。

そこで言う俺

「勝負しない？」

二人の顔が凍りついちゃった……まあ、無理もないかなー

「何を言っているの!?!?」

「いやあ、このまま帰るのもつまらないし、俺あれから訓練したからさ。ちよつと試してみたいんだよね」

せつかく魔法が使えるんだ。使えるときに使いたいです。思いつきり。

最近ユーノは相手にならないんです。弱すぎて。

あ、もちろん強いよ？バインドで腕固定したり、よくわからないチエーン技使うから。でも結局ロングレンジの砲撃連打には勝てないよね……！

「……残念だけど、断るよ。現にジュエルシールドはここにある。あなたと戦うメリットが私にはない」

もつともだな。目的のジュエルシールドはテストロッサが持ってるし。あ、でもなんか残念な顔してる……あの顔は獲物に飢えた兄貴（＝猛獣）の目……！こいつ……できる……！もう少しだ……！

「あーあー……せつかくジュエルシールドあげようと思ったんだけどな」

「……！」

そういつた瞬間に目つきとオーラが変わった。

あれ、俺いれちゃいけないスイッチ入れた？ま、まあ、いつか。

「俺に勝つたらジュエルシールドを一個献上しよう」

「いいよ……」

よし！契約成立！！  
にしても……ヤバイ。殺気がやばい……震えが……む、武者震いだ  
からな！！

そして互いに武器を持ち直した。したら

「アルフ、お願い」

「はいよ……」

何故かアルフさんが突撃してきた。咄嗟にガードを展開。

「ちょー！！テストロッサだけじゃねえの！？」

「あたしとフェイトは一心同体なのさ……」

ずるいな……2対1かよ……！どう頑張っても勝てねえ……！つてかこ  
うしてる間に歩いてくるテストロッサがこえ……！目が赤いし武器

振り上げてるし…!!

「よそ見してていいのかい？」

「い!？」

パキパキとガードが崩れ、さらに爪により引き裂かれていく。  
やばい!!

と、思ったそこへ

「なのは!ジュエルシードは!？」

「ナイスだ相棒!!ユーノガード!!」

「何があつたの!?!?どういうこと!?!?つてつわああああ!!」

アルフさんの爪によって裂かれたガードが崩れ、俺らに降りかかる  
うとするとところでユーノガード!!

さすがガード大好き!見事に防いでくれた。助かった。

そして冒頭に戻る。

「早くジュエルシードを渡して」

「どうしてこうなった？」

「ボクに聞かないでよおおおお……！……！あぶなっ……！」

うむユーノガードは本当にすごいな。

さて、本当にこれどうしようか？

喧嘩売ってみた(笑)(後書き)

誤字あつたらすみません。

でわ、次回！！戦闘だから下手かもしれないけど、よろしく！！

v s 黒い死神（厨二爆）（前書き）

思った以上にしょぼいバトルに……．．．  
って思えば戦闘シーン佳境はここよりもっと先の、v s ビル街か公園の上ですよ。バトルでお遊びはそのへんで！！

（ってか今回短っ！！）

さて、実はこつからしばらく平和な時間が続くんです（笑）  
だからしばらくはつまらないかもってか！！ ネット切れ！！

もともとアニメとか見ないからネタが乏しいんです！！笑  
なんかねたになるものくださいwwってかネタになりそうなアニメ  
マンガちよーだいくださいww

とりま、そんなかんじ！  
では、どござー！

V S 黒い死神（厨二爆）

前回の粗い筋！！

旅行中、夜に発動するジュエルシード。

遊び半分で申し出た決闘。まさかの自体にパニックッ！…どうしよう！？

「ほらほらほら！！守ってばっかじゃられるよ！？」

まずい。思った以上にアルフさんが強い。

ってかこの人ガードきかねえんだけど。くそっ！ガードが崩れちまったらやられる一方になっちゃう！！

「ガードしてるのはボクだけどね」

「素晴らしいガードなので大変驚いております」

うむ。まったくもって素晴らしいガードです。まさかアルフさんの爪を耐え続けているとは。



さて、その間に作戦を……

「フォトンランサー」

うおっ!!

くっそ!空から撃つてきやがる!!空にシールド展開!防ぐ防ぐ!!  
でもこのままじゃ負けるしかないな……仕方ない、アルフさんはユ  
ーノに任せて……

と、考えていたら

「なのは、聞いて」

「なんだよこんな時に!!」

どうでもいいことだったら承知しないぞ?

「魔力切れた」

「クソユーノ!!」

アルフさんがこっちにも来たア！！やばいやばい！挟み撃ちとか洒落にならん！！

「おいクソユーノ！アルフさんをなんとか止める！」

「いや、無理だよ無理！！無理無理無理無理！！」

ムリムリうるさい奴だな。

お前使えるじゃん。どこでもドア的な転移魔法。あれで移動な。

「いや、だから無理！！魔力ないから！！」

答えは聞いてない

ユーノの首根っこを掴んで

「ふん！！」

アルフさんに投げる

「わ！！」

見事にアルフさんに命中し、

「転移！！」

転移した。

魔力あるじゃねえかクソユーノめ。

さてさて、俺は

「待たせたね」

空中にいたテストロッサのもとへ。飛行魔法は……よし、問題無いな。

「結界魔法に転移魔法。優秀な使い魔だね」

「は！ユーノは使い魔じゃねえよ」

「じゃあなに？」

「下僕」

『違うよ！…！』

どこでみてるんだ？こいつ。

「で、どうするの？」

「話し合いで、なんとかできないかな」

「私はロストロギアを…ジュエルシードのかけらを集めないといけない。あなたも同じなら、私たちはジュエルシードをかけて戦わなければならない」

「だから！そういうのを決めつけないために話し合いは必要なんだと思う！！」

「いきなり話し合いもなしに喧嘩をふっかけてきたあなたに言われたくはない」

ごもつとも。

「どうせ言葉だけじゃ、何も……伝わらない！！」

「……！！」

言葉を言うと同時にテストロツサはなのはの裏に周り自らの武器、バルディッシュをなのはに叩きつけるべく横に薙いだ。

突然背後に現れたことに驚き、一瞬反応が遅れる。

でも、まあ！素人の振り方だ！確かに速いが、兄貴の竹刀に比べれば……あ、寒気が。

「ハエが止まるぜ！？レイハ！！」

《Flier Finn!》

空に移動しながら逃げる。しかしそれより早くテストロッサが空へ舞っていた。

「どんだけ早いんだよ!? こいつ! …… そういえば、この間俺が倒れる瞬間には背後にいたな… 目指できないレベル… 音速超え?

しかし考える暇がない

「はあああ! ……」

上空から突進してくる。

自らのスピードと重力でもかかっているのか、とてつもないスピードだ。

「うおっ! ……」

かろうじてそれを躲す。テストロッサはなのはの横を通り、そのまま抜ける。

「…ふうん。なるほど。見えた(…)! ……」

「ふっ! ……」

再び突進してくるテストロッサを

「ほっ！」

避け

「つえあー!!」

「!!!?」

そのまま腕を掴み上空へ放り投げる。  
無効も驚いた顔をしている。内心俺もびっくりだ。

「何を、したの？」

そこまで驚くことかね。  
しかたない。なのは先生が指南してあげよう。

「俺の横を通り抜けるとき、デバイスを持っていない方の手が一瞬残ってるんだ。いい隙だぜ？」

「……………ふうん」

それだけ言うよテストアロツサは一度身を翻し、

「サンダースマツシャー」

魔力を集め始めた。これは……！！

「ユーノをいじめる時の俺の図……！！」

『どういことかな？』

だからどこで聞いているんだよ。ってか聞いている暇があるならこっち手伝えよ。

214

『ユーノ何やってんの？アルフさんは？』

『え、ああアルフさんならね……』

『やつほーなのは！どうだい？ご主人様は強いだろ？』

『なぜアルフさんが！？』

くそ！おもわず突っ込んだしまった……！！  
どうい状況？

『いやあ、転移をしたのはいいんだけどね？見事に川に入っちゃって溺れてたら助けてくれたんだよ』

自業自得じゃん。

で？

『あたしの勝利報酬としてこいつの体をいただきます！』

『嘘でしょ！？やめて！ボクおいしくない！』

『あ、なんだ。そんなでいいの？いつでも食べちゃってよ』

『なのも止めてよ！！ってかボクの発言権は！？』

『『ない』』

敗者は黙っとれ。

『とじろでなのは』

『ん？』

『砲撃迫ってるよっ。』



「……っ、もう目の前じゃねえか……！」

「どうする……どうす……！ピコーン……！なんだ、相殺すりゃいいんじゃないか……！」

「いまからユーノいじめもとい砲撃撃つても間に合わないから……まあ、人体からも出せる……よな？」

「うっおおおお……！」

「なんとなく魔力が腕にある感じをイメージして突き出す……！したら」

「パン……！」

「とかいう破裂音と共に砲撃がはじけた。腕から出た衝撃が砲撃をど……ん。」

「あつぶね……。なんだ今の？」

「うわー……なのはがっいに素手で魔法破ったよ……！」

「魔法陣もなしなんて……ってかあれ魔法？」

「外野は黙つとれ。俺も混乱してるんだ。」

「さて、肝心なテストアロツサは……いねえ……！」

「サイススラッシュ」

「！！？」

完全に見えない角度から鎌を突きつけてきた。首筋でピタリと止まっている。

「……………俺の敗因は？」

「魔法に関して無知な事かな」

「ふむ……………ご指南ありがとう」

だって魔法知らないもんね。  
ところでテストアロツサ

「その刃ジリジリしてて俺の髪の毛チリチリ」

「あっ」

あーあ。部分パーマ完成だよこりゃ。

「いやあ、強い強い。まいった。ほら、ジュエルシード」

「あっ!!」

敗者は潔くあれ。

レイハからジュエルシードを取り出し、テストロッサに投げた。テストロッサはそれを見事にキャッチし、自らのデバイスに収納した。そしてそのまま地面へ着地。追って俺も着地した。

「強いなー……やっぱ訓練やるしか」

「あなたも、強かった」

「そういつてくれりゃあ助かる」

さて、なんだかんだでもう結構時間立ってるんだよな

「テストロッサは、どうする?」

「私は、このまま帰るよ。ほかのジュエルシードも探さなきゃならないし……」

「そっか……」

残念だなあ……魔法教えてもらおうと思ったんだけど……

『なのは、そんなに魔法知りたいの?』

『まーね。男として負けたままというのはやだ』

仕方ないさ！男の子だもん！

『ボクがいるじゃないk………』

『弱いじゃん』

orzの形になるユーノ。

なに？そんなに砲撃喰らいたいのか？M？

『違うよ！』

あつそ。

「ああ、そうだ。まだ海鳴にいるんだったら翠屋に来るといい。うちの親がやってるんだけどな。なんだかんだでうまいんだ」

「???わかった。今度行ってみる」

「ん、じゃあ、ここで別れるか」

「そうだね」

俺は旅館の方向へ、テストロッサは森の方へ向かう。

……森に小屋でもあるのだろうか？

「また、勝負しようぜ。ジュエルシードかけて」

「まだもってるの!？」

「まあ、いくつか」

「……………全部もらうからね」

「もう負けねえよ」

そう、ライバルめいたことを言っつて、俺たちは別れた。

こういったはいいけど……………勝てるのかな……………本当に全部取られそう  
だ。こりゃあ、帰ったらとつくんだな!!

『どつせボクは……………』

いつまでウジってるんだよ……………。



V S 黒い死神（厨二爆）（後書き）

一言…

いぬんぐわい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5852z/>

---

魔法少年リリカル？なのは

2012年1月14日01時50分発行